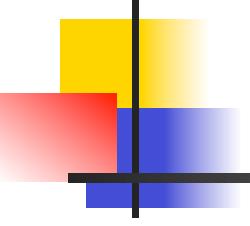


地球環境・エネルギー問題解決への挑戦

宇宙太陽光発電システム

October 2009

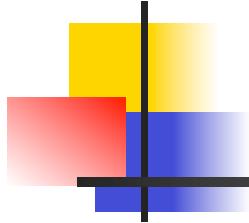


講演内容

1. 太陽発電衛星の概念と研究の歴史
2. 太陽発電衛星実現に必要な技術
3. 我が国で検討中の太陽発電衛星の構想と実現へのロードマップ
4. 研究現状と近未来の実証実験の計画

用語

宇宙太陽光発電システム=太陽発電衛星, 宇宙太陽発電所
SPS(Solar Power Satellite)
SSPS(Space Solar Power Systems)

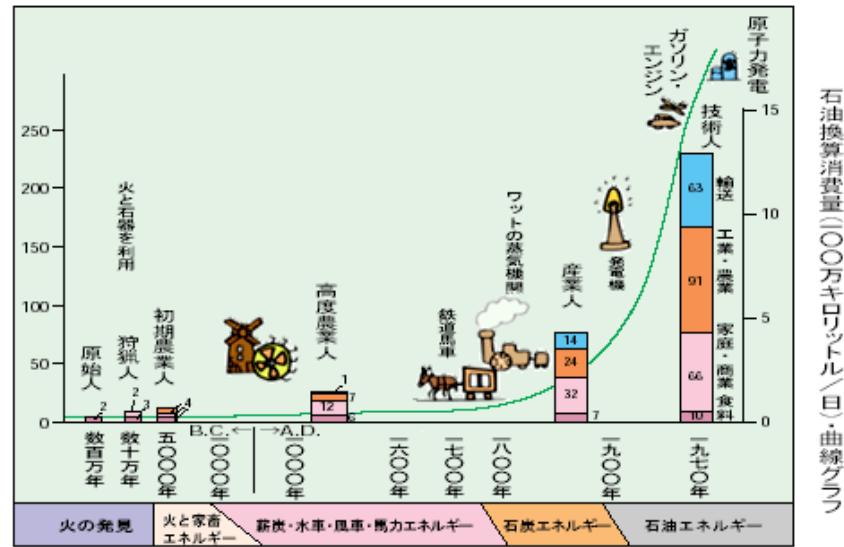


1. 太陽発電衛星の概念と研究の歴史

- ・エネルギー問題と地球環境問題
- ・太陽発電衛星の概念と特徴
- ・太陽発電衛星の研究の歴史
- ・過去の太陽発電衛星の代表的な設計例

エネルギー問題：世界のエネルギー資源

人類とエネルギーのかかわり



原始人
百万年前の東アフリカ、食料のみ。
十万年前のヨーロッパ、洞窟に薪を燃やした。
B.C.5000年の肥沃三州地帯、穀物を栽培して畜のエネルギーを使つた。

狩猟人
薪炭・水車・風車・馬力エネルギー

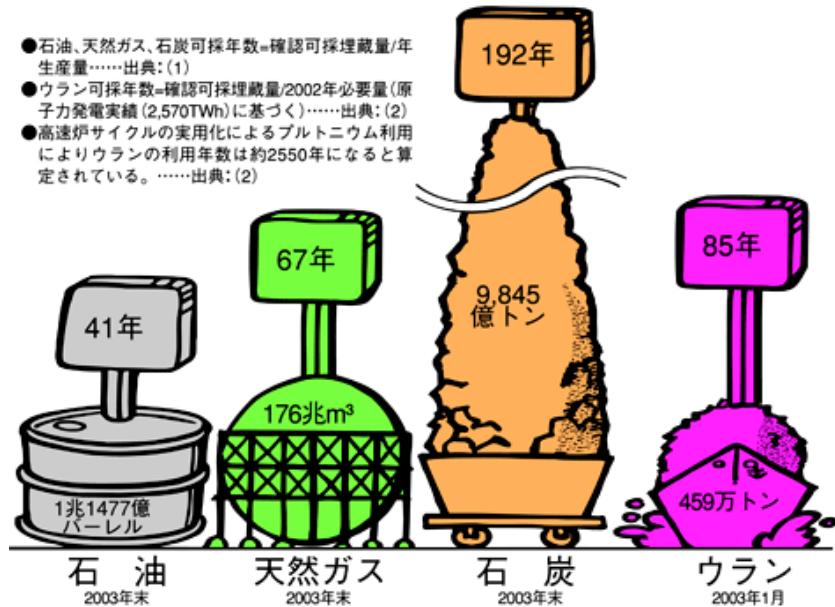
初期農業人
火と家畜

出典：総合研究開発機構「エネルギーを考える」

石油換算消費量(100万キロワット/日)・曲線グラフ

世界のエネルギー資源確認埋蔵量

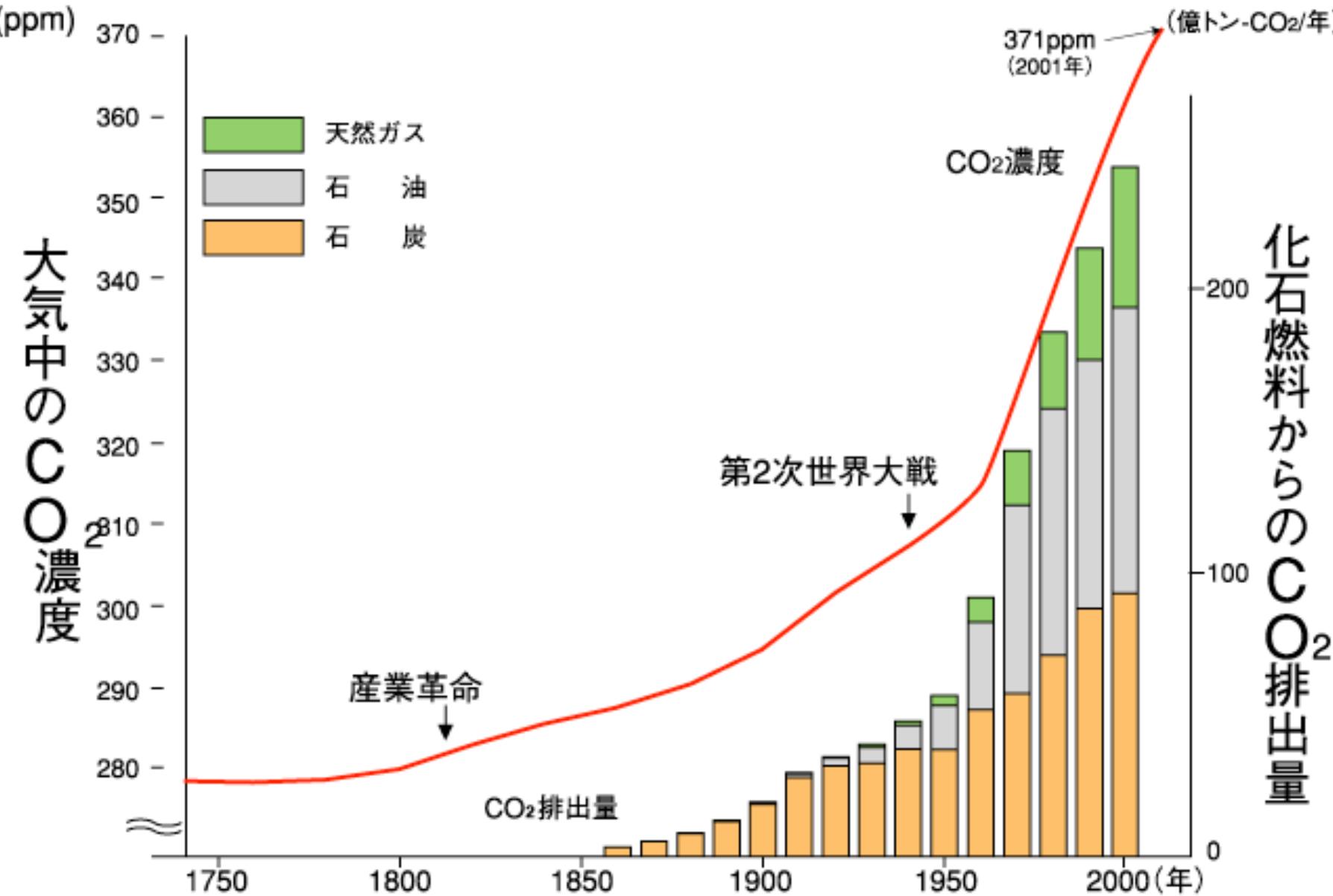
- 石油、天然ガス、石炭可採年数=確認可採埋蔵量/年生産量……出典：(1)
- ウラン可採年数=確認可採埋蔵量/2002年必要量(原子力発電実績 2,570TWh)に基づく)……出典：(2)
- 高速炉サイクルの実用化によるプルトニウム利用によりウランの利用年数は約2550年になると算定されている。……出典：(2)



出典：(1)BP統計2004
(2)URANIUM2003

- ・化石燃料は0.02%の変換効率で太陽エネルギーを2億年かけて蓄積。人類はこれをわずか100～150年で使い切ろうとしている。
- ・石油の残存量(1兆バarel)は富士山を逆さにした容器として見てるとその1/8程度しかない。

化石燃料からのCO₂排出量と大気中のCO₂濃度の変化



(注)1850年以前の化石燃料からのCO₂排出量のデータは無いため記載していない。

出典：環境省資料、気象庁資料、エネルギー・経済統計要覧 2003年版

宇宙空間における太陽のエネルギー量

太陽からの地球へのエネルギーは
 1.77×10^{17} Watt

現在の人類のエネルギーの消費量の
15,000倍

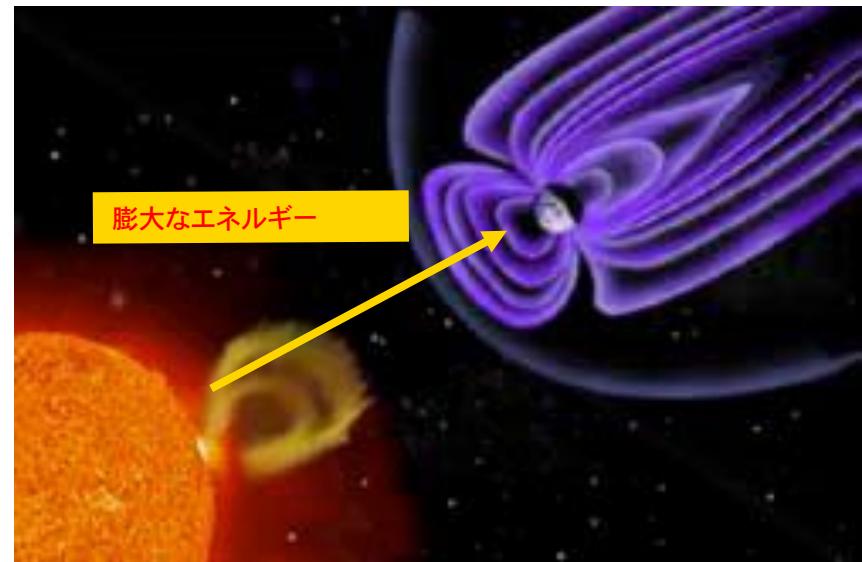
→太陽エネルギーは人類のエネルギー源として大きな可能性を持っている。

地球周辺の宇宙空間での太陽光のエネルギー密度は $1,350\text{W/m}^2$

地上での太陽光の年間平均エネルギー密度は $100\sim 200\text{W/m}^2$

理由：夜の存在、曇天・雨天の存在、大気による減衰

→ 宇宙空間から地上への効率の良い電力輸送が可能であれば宇宙空間を太陽エネルギー取得の場として利用することが有望。

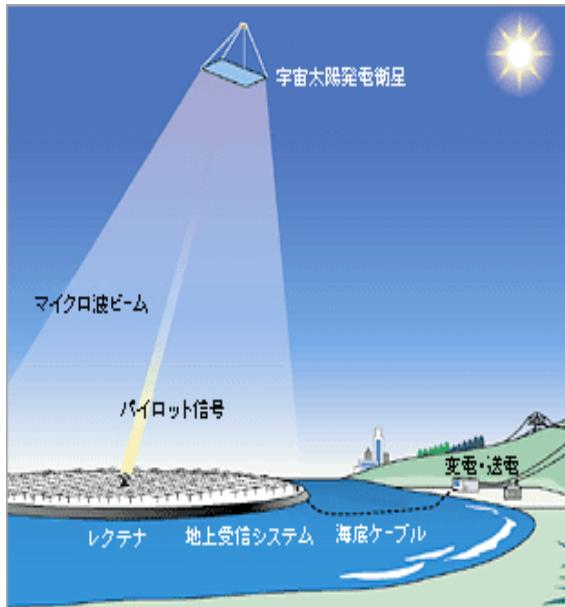


→ 宇宙太陽発電所

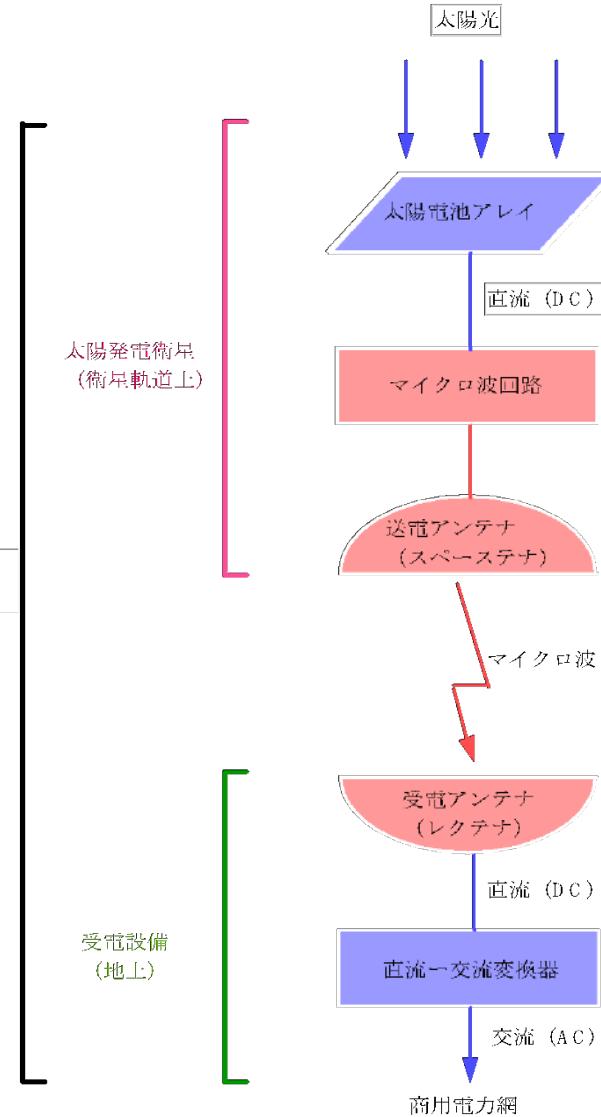
宇宙発電衛星(SPS)の原理と構成



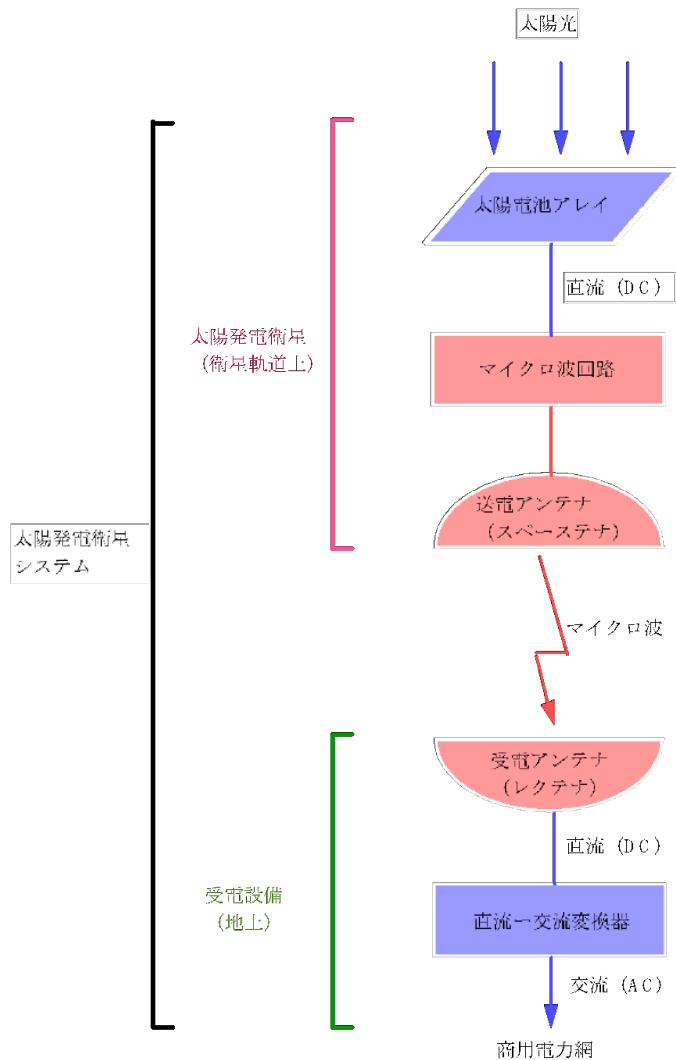
地上の太陽光発電所(ドイツ5MW)



宇宙の太陽光発電所: 宇宙発電衛星



宇宙太陽発電所の原理とエネルギー・システムとしての特徴



宇宙での太陽光からのエネルギー取得の効率は地上太陽光利用の場合の**5～10倍**。一方無線送受電の効率は**50%**が期待できる。

従ってこのシステムは地上の太陽光利用に比べ**2.5～5倍**の高い効率で変動のない電力を供給できる**可能性**を持っている。

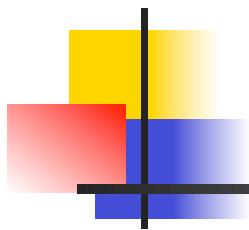
クリーンで大規模なエネルギー・システムの**可能性**

- EPT (Energy Payback Time) : **数年**以下
- コスト : **10～30円／kW·h**
- CO₂負荷 : **化石燃料火力発電の数十分の一**以下
- 取得可能エネルギー : 実質的に**無制約**

太陽発電衛星システムのエネルギーペイバックタイム

システム	SPS	地上システム	
SPSの製造場所	地球周回軌道	月面	地上
投入エネルギー[10 ⁹ MJ](A)	53	37	8. 2
モジュール製造	22	22	8. 2
モジュール輸送	31	5.1	—
年間発電量[10 ⁹ Wh/年]	7.88	7.88	1. 23
一次エネルギー換算[10 ⁹ MJ/年](B)	76.7	76.7	12. 0
EPT[年](=A/B)	0.69	0.35	0. 68

山田、加藤、第1回SPSシンポジウム、平成11年



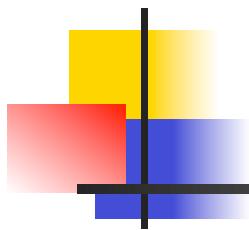
太陽発電衛星システムのCO₂負荷

太陽発電衛星のCO₂負荷

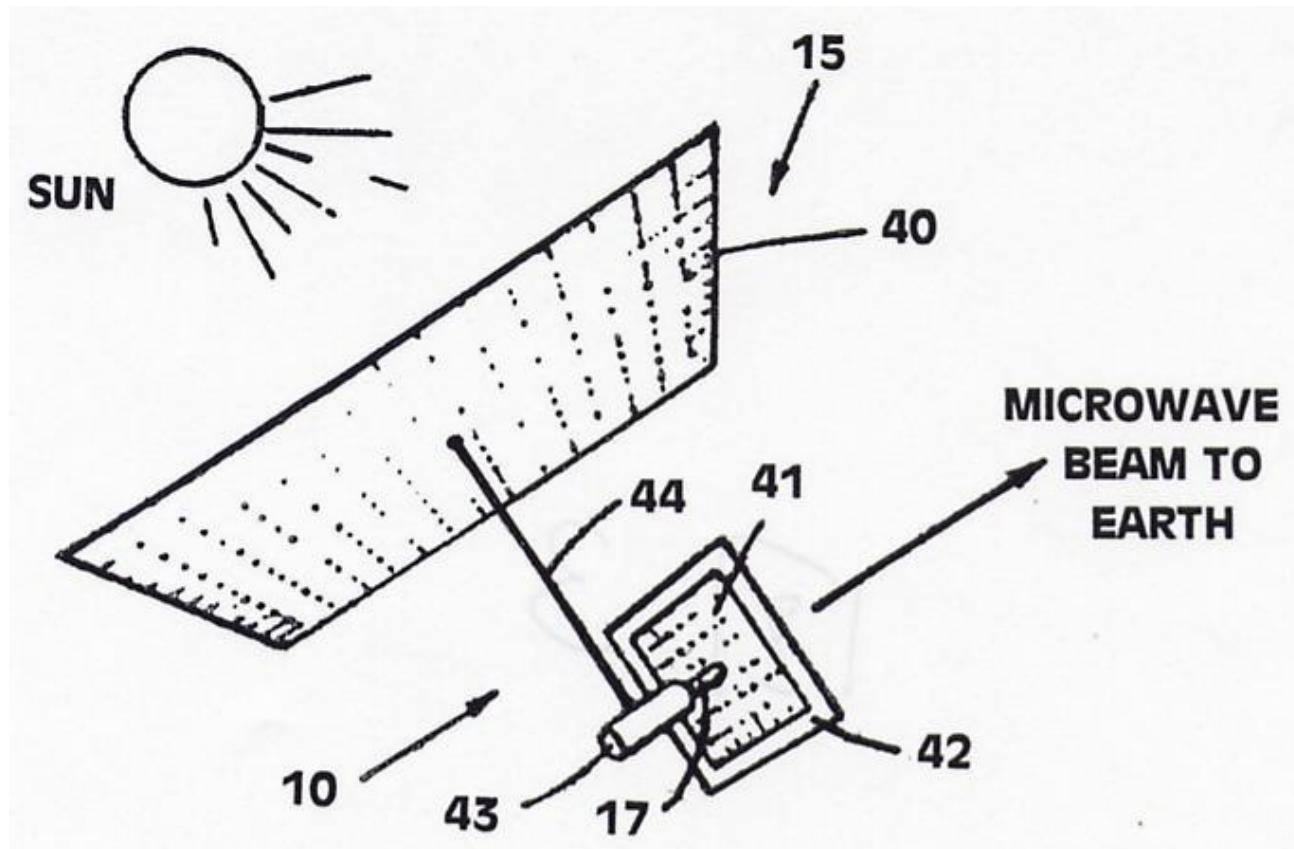
(g-CO₂/kW·h)

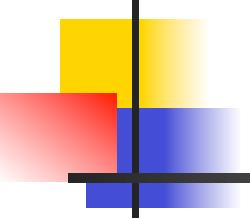
発電方式	経常運転時	建設時	合計
太陽発電衛星	0	20	20
石炭火力発電	1222	3	1225
石油火力発電	844	2	846
LNG火力発電	629	2	631
原子力発電	19	3	22

吉岡、菅、野村、朝倉、第1回SPSシンポジウム、平成11年



ピーターグレーザーの特許公告



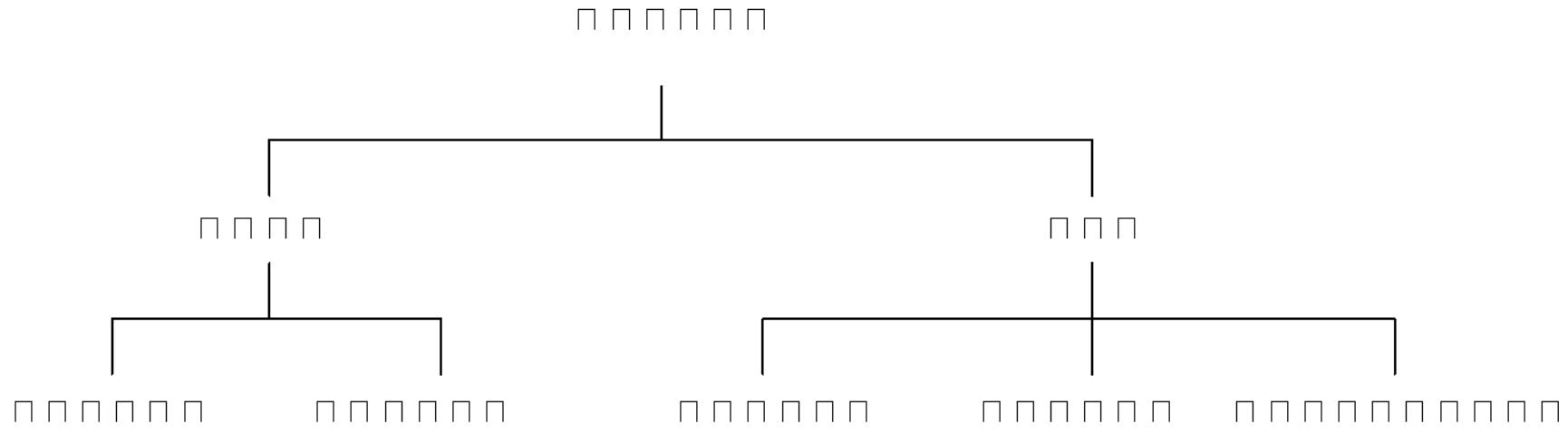


宇宙太陽発電所研究の歴史

1968年	ピーターグレーザーのサイエンスの論文 “効率的で安全なマイクロ波ビームによる電力伝送、宇宙空間における電力 プラント”の概念、特許化（1973年）
1970年代	NASA/DOE(US Department of Energy) リファレンスシステム 1977-1980 NASA 約2000万ドルを投じ概念設計 1978 DOEのSPS Concept Development and Evaluation Program(CDEP)
1980年	米国でのシステム的研究はレーガン政権の財政緊縮方針中断
1983年	観測ロケットによるマイクロ波送電実験（世界初）
1990年代	環境問題のたかまり、エネルギーオプションの必要性から 再注目
1990年	宇宙科学研究所 SPS 2000 研究スタート
1995年	NASA研究再開（-2004）
1999年～	NASDA調査研究（現JAXA）、USEF調査研究
2009年	宇宙基本計画に宇宙太陽光発電の研究開発を明記

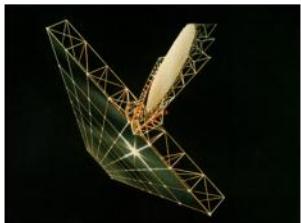
赤字：我が国の事項

宇宙太陽発電所の分類



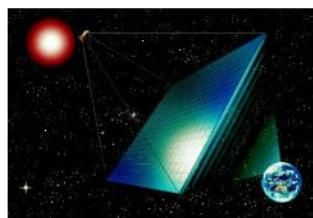
NASA ---
SPS2000

NEDO ---



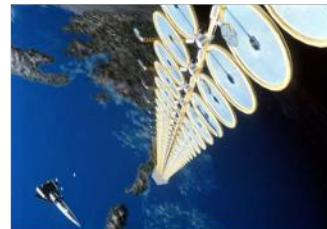
USEF ---

(Tethered-SPS)



NASA ---

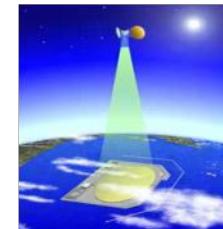
NASA ISC



NEDO ---

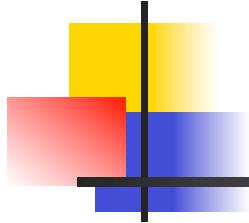
NASDA2001 ---

USEF ---



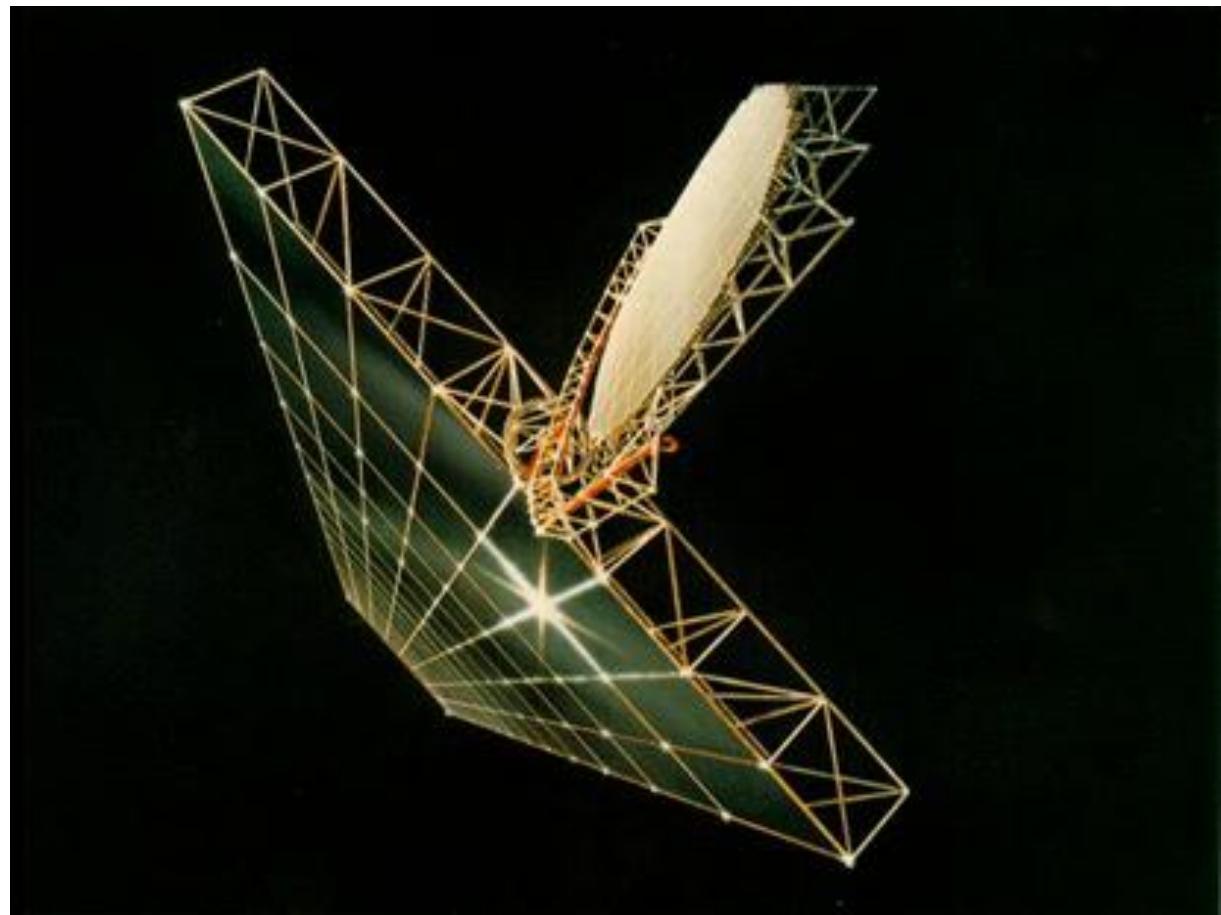
NASDA --- SPS ---

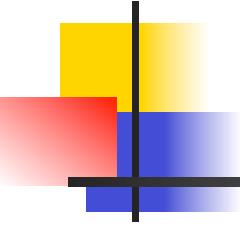




米国NASA リファレンスシステム

SPSの古典的なモデル
出力 5 GW
重量 5万トン
面積 5 km x 10 km
厚さ 0.5 km
送電アンテナ直径 1 km

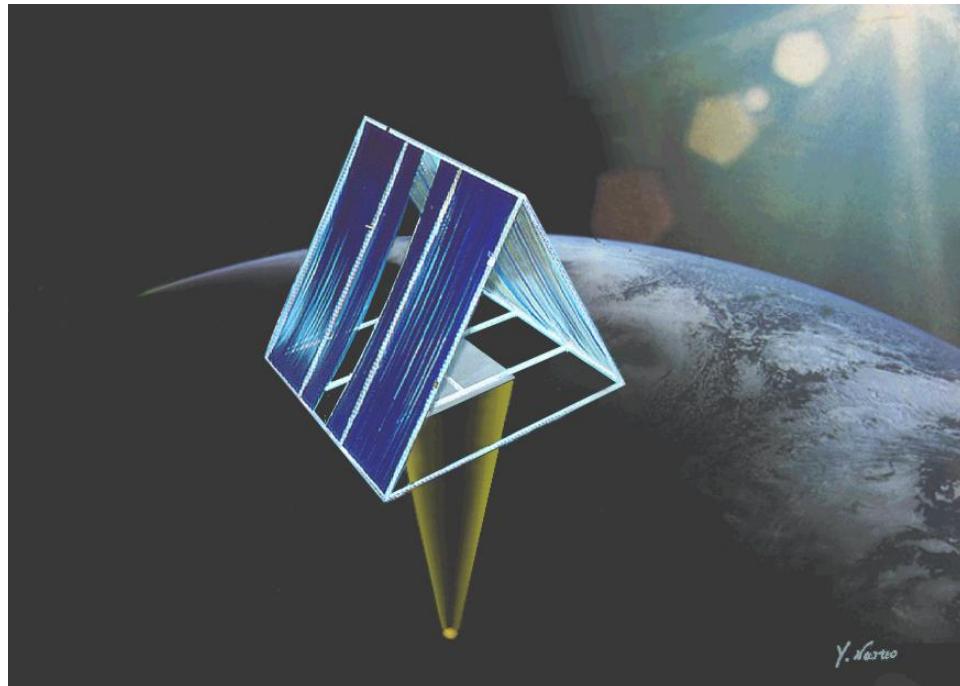


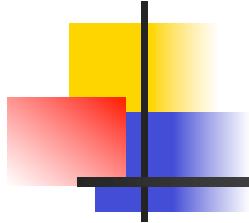


宇宙科学研究所のSPS2000モデル

日本で初めての本格的な S P S の設計研究

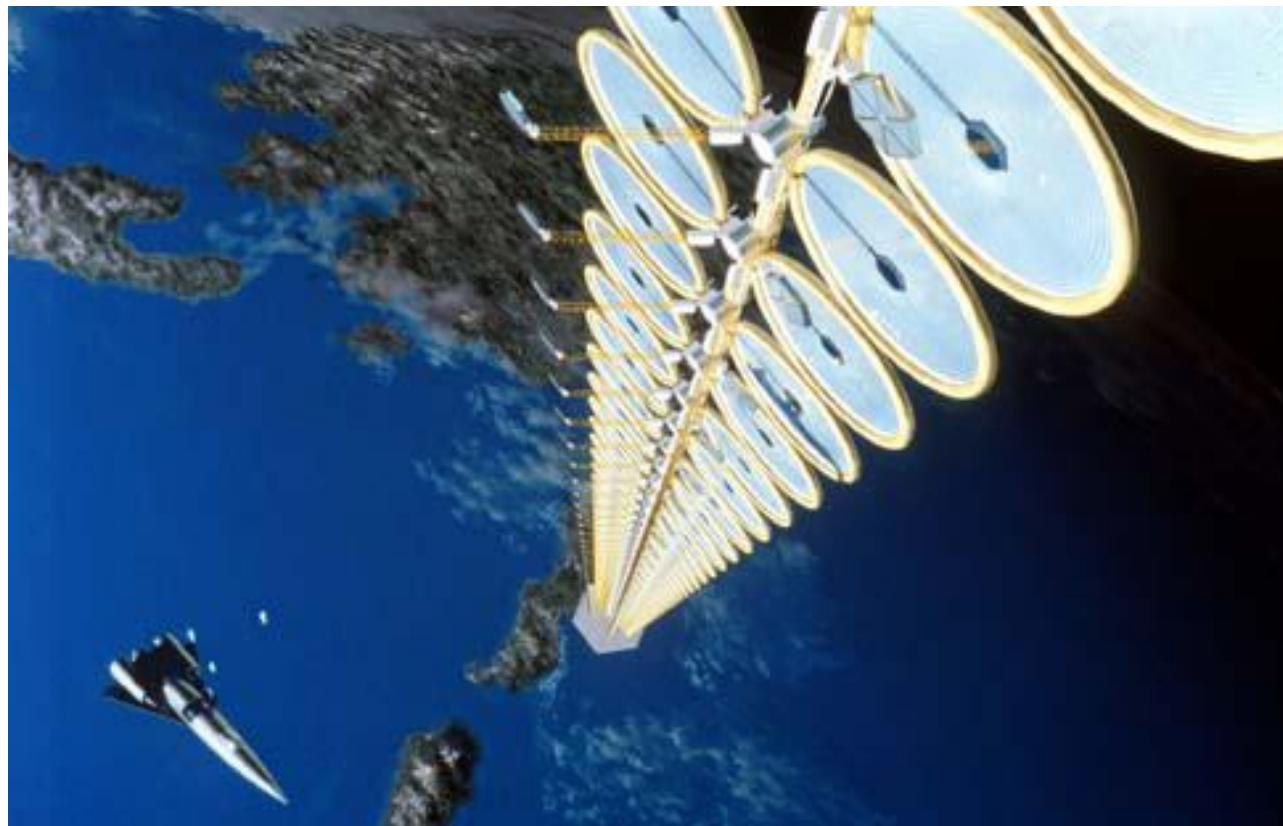
事 項	諸 元
軌道	赤道軌道高度1,100 km
構造	断面330 m の正三角形、長さ300 m
姿勢制御	重力安定
組み立て	自動展開及び組み立てロボットの組合せ
発電電力	1万6千kW
発電電圧	1,000 V
地上受電電力	1万 kW
送電媒体	マイクロ波 2.4 GHz
送電アンテナ	フェイズドアレイによるビーム方向制御
地上受電アンテナ	リフレクタ付きワイヤーアンテナ
総重量	240 トン
打ち上げロケット	アリアンV (16 回のフライト)
運用	日照時のみ送電
寿命	10 年以上

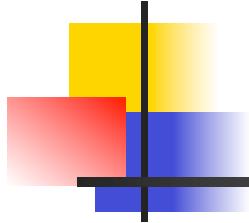




NASAのサンタワー

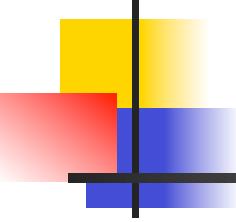
NASAの研究再開時の
スタディモデル
出力100～300MW
高さ15km
集光ミラー直径60m
送電アンテナ250m





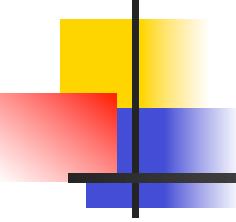
2. 太陽発電衛星実現に必要な技術

- 主要技術の現状と目標
- 宇宙発電技術
- 無線送電技術
- 大型構造物構築技術
- 打ち上げ輸送技術



SPS実現のための主要技術の目標

主要な技術	現状の到達レベル	目標レベル	ファクター
宇宙太陽光発電	数十kW（国際宇宙ステーションで80kW）	GW	10,000
発生電圧（バス電圧）	100～150V	1kV以上	10
マイクロ波送電	数十kW（地上）、1kW（宇宙）	GW	100,000
排熱	数十kW	数百MW	10,000
大型構造物	100mクラス（国際宇宙ステーション）	数km	10
宇宙輸送のコスト	100～200万円/kg	1万円/kg	1/100



発電分野の技術課題

技術課題	前提となる 産業技術・ 宇宙技術	宇宙太陽発電技術としての技術開発			
		要素技術開発・ 評価・実験室実 験	地上 実証 実験	軌道上実証実験 (10MW程度以下)	パイロットプラント(100 MWクラス)
高効率(比重量、 比面積)、低成本 太陽電池	産業用太陽 電池の高効 率、低成本 化	—	—	—	—
太陽電池の耐宇 宙環境性	—	放射線照射実験 対デブリ耐性評価 高電圧放電評価 実験	—	耐放射線性実証 対デブリ耐性実証 宇宙高電圧発電技術 実証	—
オプション技術(熱 発電)の可能性	地上用熱発 電技術の実 用化	効率、コスト、寿命 評価	—	—	—

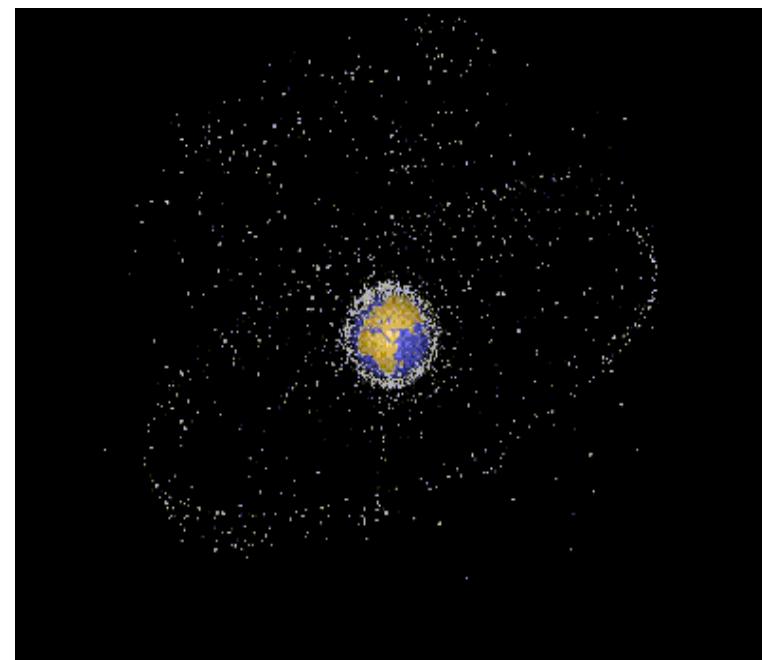
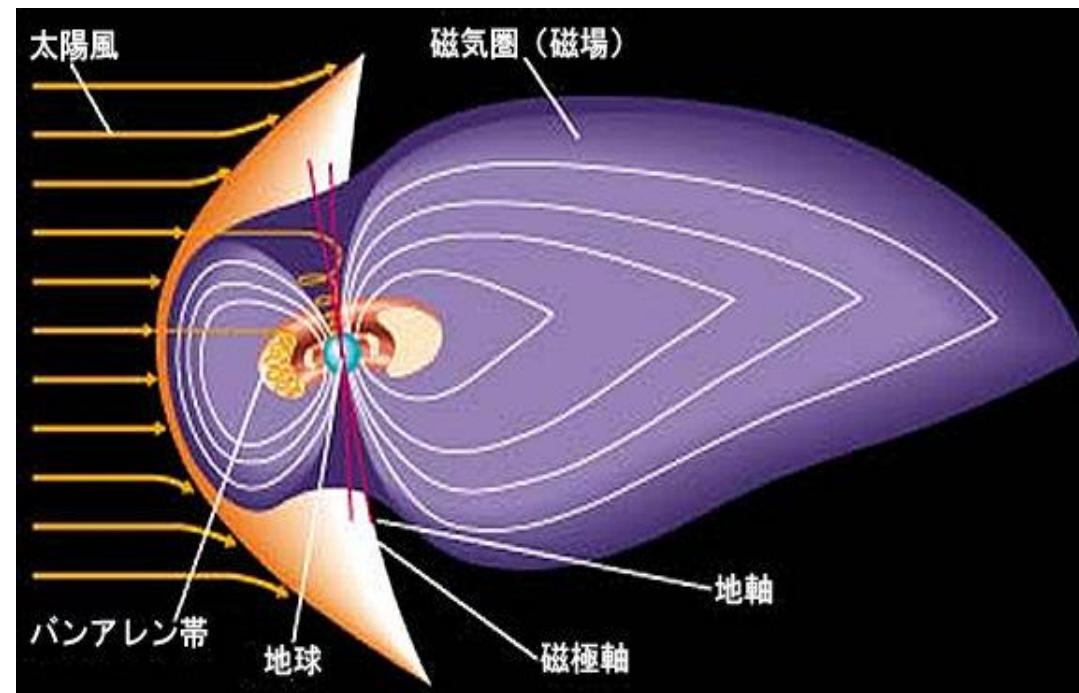
太陽発電衛星用の耐宇宙環境性

高い宇宙放射線耐性

⇒耐性の高いタイプのセル選定

デブリとの衝突破壊を考慮した設計

⇒故障が伝搬しないモジュール化設計

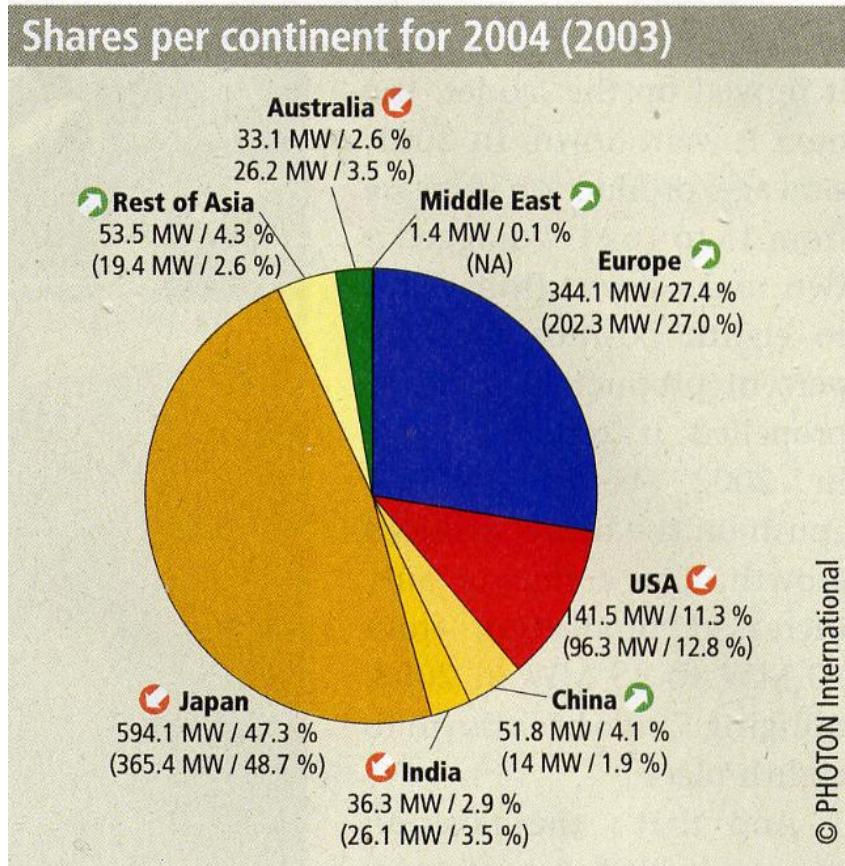


太陽電池の種類と太陽発電衛星用として有望なタイプ

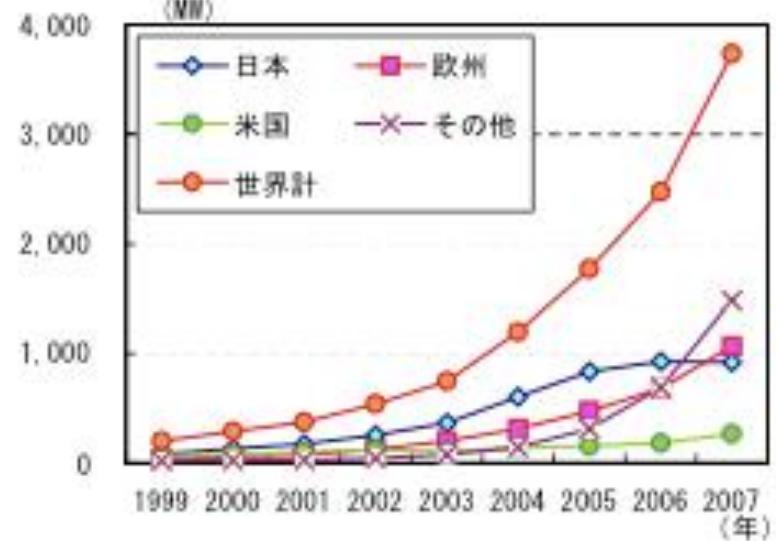
薄膜、フレキシブル、軽量、高効率（重量当たりの電力）

型	種類	特徴	技術的課題	SSPS用としての評価
バルク型	Si（単結晶、多結晶）	現在の生産の主流	技術的に成熟に近い	重量あたりの出力が低い
	III-V族 晶化合物	超高効率 宇宙用、高コスト	更なる高効率化（40%目標） 集光系との組み合わせで低コスト化。但し、集光システムの重量を考慮し、放熱を検討する必要有り。	資源的制約(Ge, In)集光系との組み合わせで可能性有り。但し、正確な太陽指向が必要
*薄膜型 (10 μm以下)	アモルファスシリコン	量産性、低成本、製品としての先行	効率改善（10%→12%） 大面積化、安定化、高速製膜、高い歩留まり、ロール化	当面有力
	CdTe	構造が簡単で安定性が高い 低成本の可能性	常圧下でのCdTe 膜の形成技術、高品質化、大面積化	資源的制約(Cd, Te)
	CIS	高効率、長寿命、耐放射線性に優れる	バンドギャッププロファイルの最適化、均一性	資源的制約(In) 将来有望
	多結晶シリコン	ハイブリッド型での組み合わせ	歩留まりの良い多結晶膜	
	化合物	高効率(25%)	コスト、放射線性の検証	新規、今後の展開待ち

世界の太陽電池の生産量と推移



図表2【国別】太陽電池生産量の推移

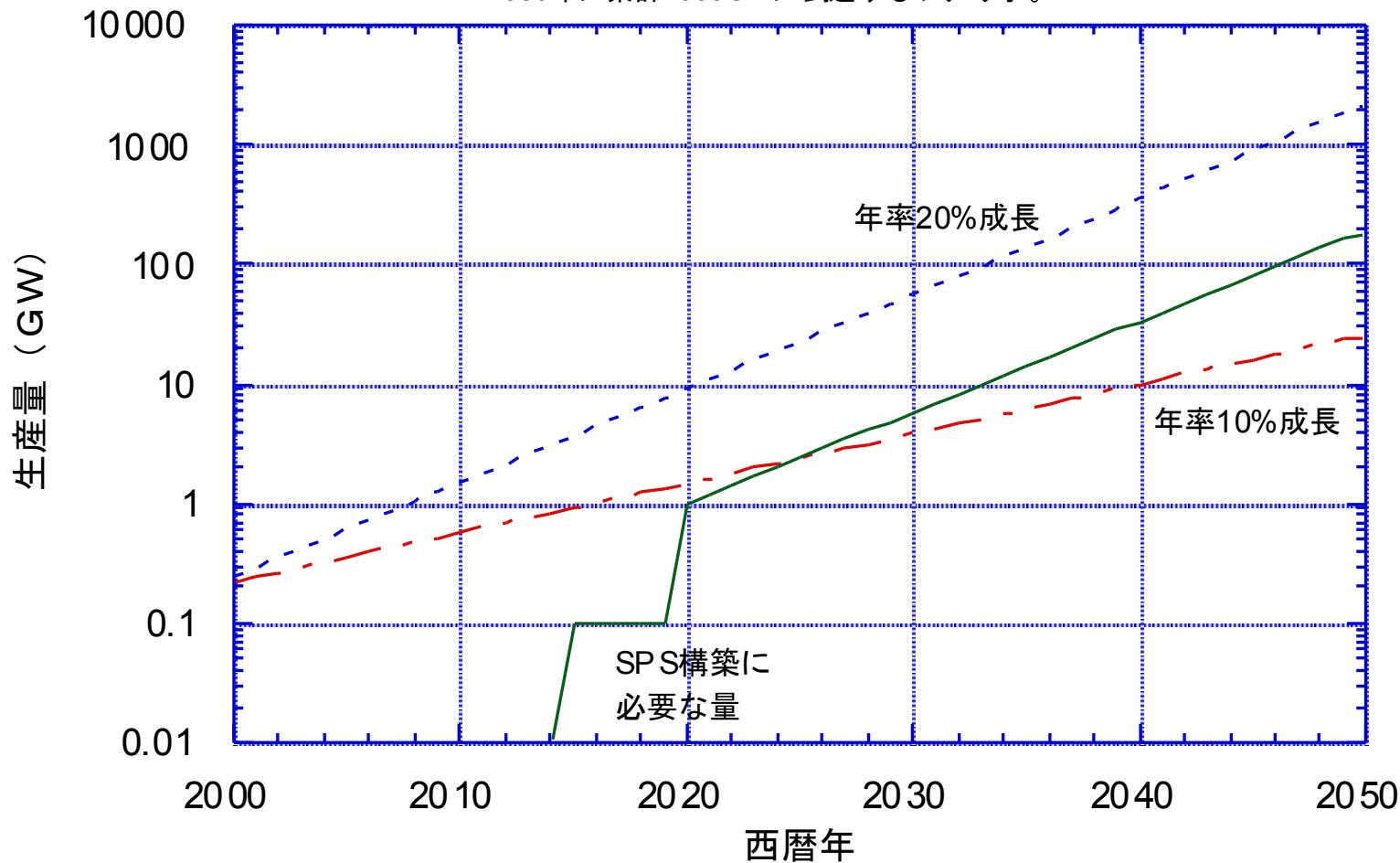


日本政策投資銀行、今週のトピックスNo.122-1,2008年4月
www.dbj.jp/reportshift/topics/pdf/no122.pdf

世界の太陽電池生産量(PHOTON International March 2005)

SPS構築に必要な太陽電池の生産量

2020年から1GWレベルで構築開始。
2050年に累計1000GWに到達するシナリオ。

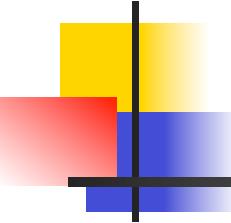


送電分野の技術課題

技術課題	前提となる産業技術・宇宙技術	宇宙太陽発電技術としての技術開発			
		要素技術開発・評価・実験室実験	地上実証実験	軌道上実証実験(10MW程度以下)	パイロットプラント(100MWクラス)
マイクロ波ビーム制御	レーダー技術の発展	ビーム制御技術の開発	数百m～数kmでの送電実証	数百km伝送、軌道条件でのビーム制御実証、電離層通過実証	数千km～数万km伝送、軌道条件でのビーム制御実証
高効率・低コストマイクロ波増幅・制御	携帯電話など通信産業がリードする高効率・低成本・低損失マイクロ波素子の開発	システムとしての高効率・低損失回路技術の開発	—	—	—
オプション技術(光送電)の可能性	レーザー産業技術の発展	効率、コスト、耐久性評価	—	—	—

赤字: SPSのコンフィギュレーションに強く依存しない共通技術、コア技術

青字: オプション技術またはSPSのコンフィギュレーションに強く依存する技術

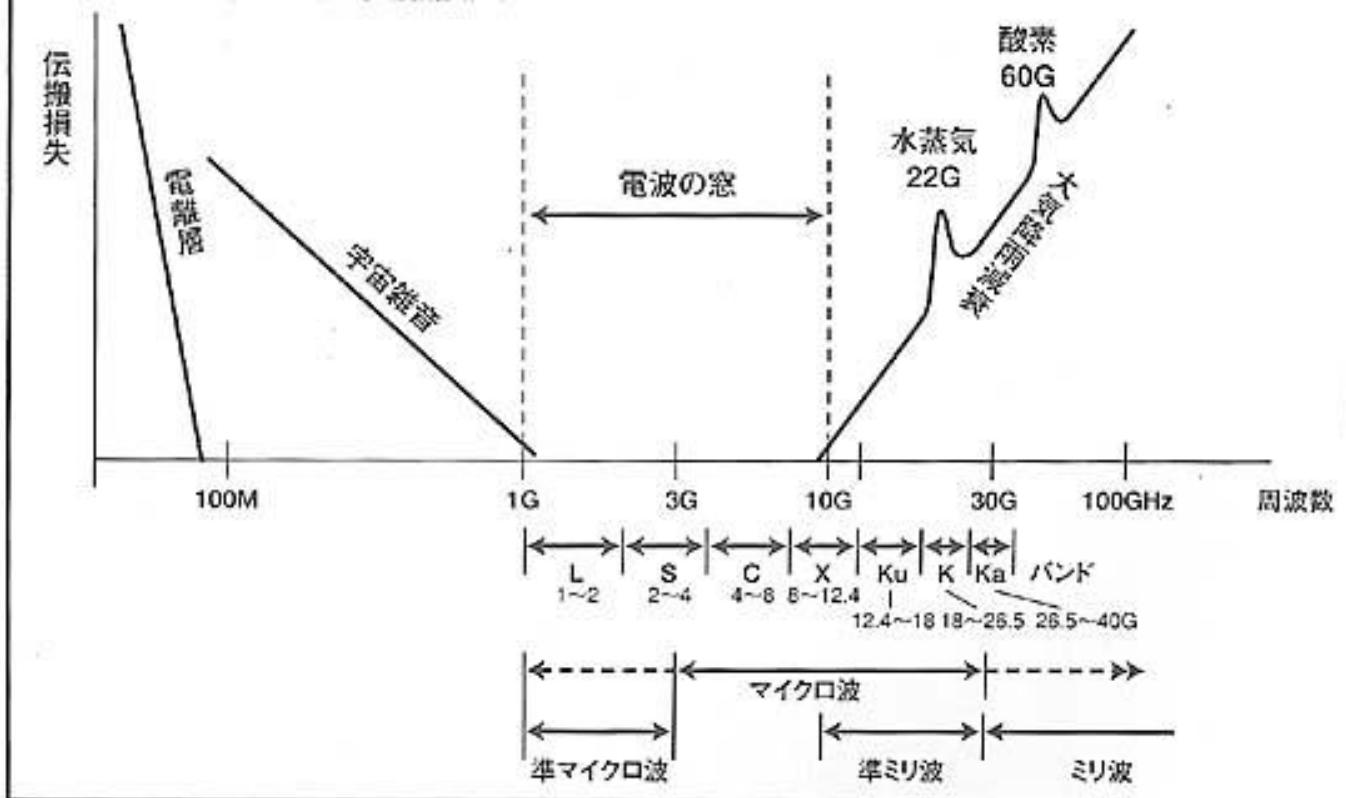


無線電力送電の手段

無線送電方法	マイクロ波	レーザー
周波数／波長	~several GHz	~1 μm
電力変換	太陽光-DC-マイクロ波…DC	太陽光-レーザー…DC
電力変換効率	高	低
システムの大きさ	大	小
ビームのエネルギー密度	小(安全側)	大
既存インフラとの電磁適合性	低	高
送電の天候依存性	小	大
技術の成熟性	大	小
適用予測	近未来Space-Ground送電実験	Space-Space送電

電波の窓

図1 電波帯と大気伝搬損失



キクスイホームページ キクスイ・ナレッジ・プラザ

http://www.kikusui.co.jp/knowledgeplaza/microwave/microwave01_j.html

マイクロ波送電実証実験

NASAの送電実験
送電距離1マイル
送電電力30 kW
電力効率54%
1975年



レクテナ(受電アンテナ)の大きさ

静止衛星軌道(NASA Reference System)

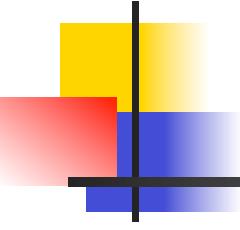
送電アンテナ	1km(直径)
送電距離	36,000km
受電アンテナ	10km (直径)

低高度軌道(SPS2000)

送電アンテナ	100m (直径)
送電距離	1,100km
受電アンテナ	1km (直径)



NASAのリファレンスシステムのレクテナ



マイクロ波送電素子の比較

2GW, 500m直径アンテナの場合のケーススタディ

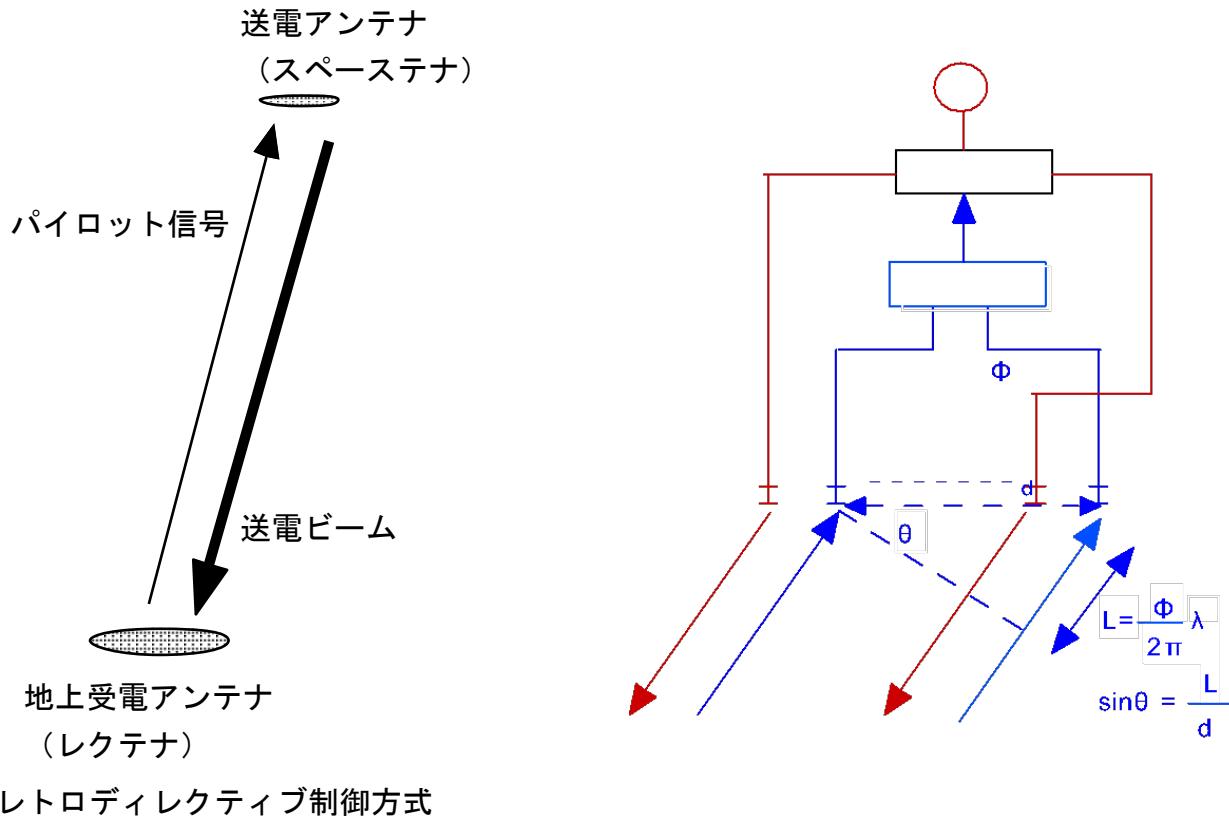
パラメーター	クライストロン (Dietz et al., 1981)	マグネットロン (Brown, 1980)	半導体
最大出力	26,000 W(CW)	5,000 W(CW)	59 W(CW)
作動電圧	28,000 V	6,000 V	80 V
効率(DC-RF)	83 %	85.5 %	90 %
素子重量	14.15 kg	1 kg	0.001 kg
運用温度	300°C(電子管本体温度) 500°C(コレクター温度)	350°C(ラジエータ温度)	300°C(ジャンクション温度)
500mアンテナでの個数	209,853	400,000	84,001,536
面積当たりの重量	40.4 kg/m ²	32 kg/m ²	33.9 kg/m ²

J.O.McSpadden and J.C.Mankins, 2002

マイクロ波送電ビーム方向制御

SPS技術の中で最も困難な技術

レトロディレクティブ制御: 地上局の誘導電波を用い正確に数百～数万km離れた地上アンテナに向けて送電(静止衛星の場合であれば1km離れて3cm内に指向する精度)



リファレンスシステムの例(2.45GHz,Gaussianの場合)

R.H.Dietz, et al., Satellite Power System: Concept Development and Evaluation Program, Vol.III-Power Transmission and Reception Technical Summary and Assessment, NASA Reference Publication 1076, 1981

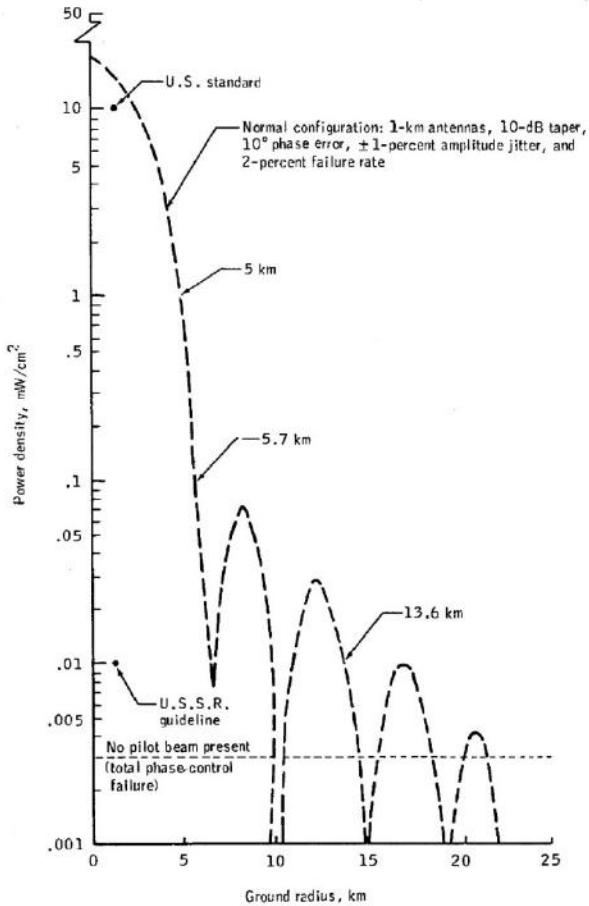


Figure III-6.- Power density at rectenna as a function of distance from boresight.

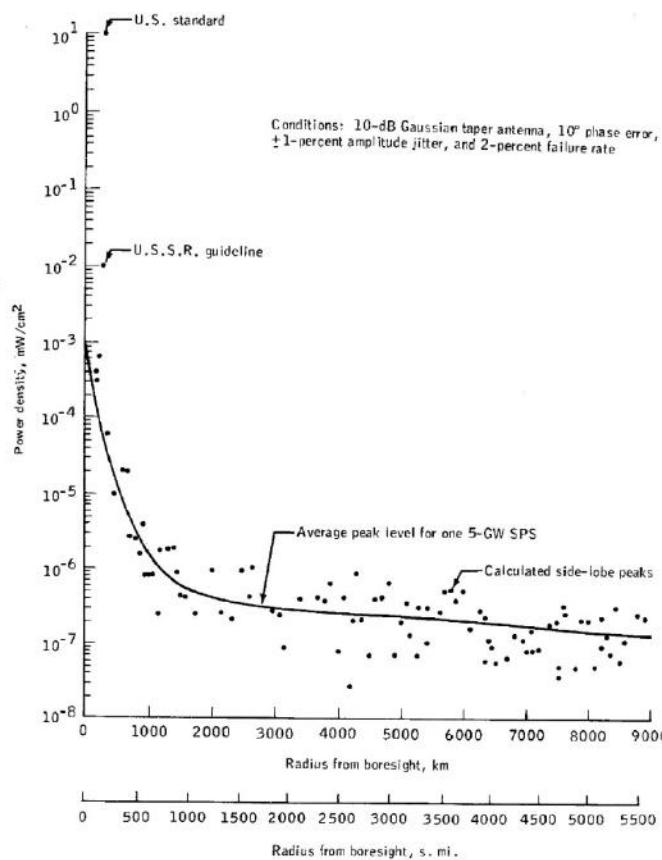


Figure III-7.- Peak power density levels as a function of range from rectenna.

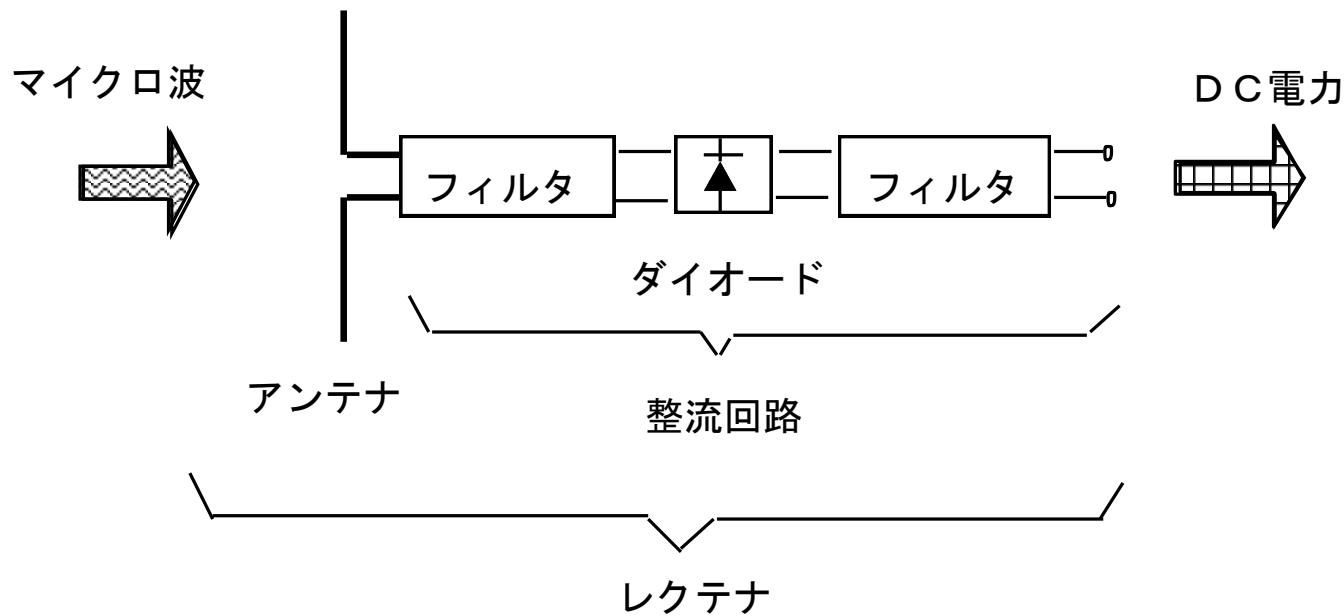
受信アンテナ（レクテナ）

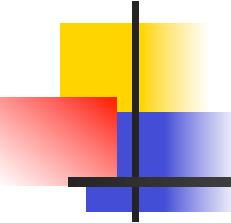
$$\eta = \frac{P_{\text{out}}}{P_{\text{fd}} \times A_{\text{RP}}} \times 100 \ [\%]$$

P_{out} : レクテナアレーからの直流出力電力

A_{RP} : レクテナアレーの面積（物理開口面積）

P_{fd} : マイクロ波の入射電力密度





レクテナの効率

Rectenna type	Paper	Frequency (GHz)	Peak Conversion Efficiency (%)	Peak output power/Element (Wdc)	Polarization	Mass to DC Output Power Ratio(W/kg)	Specific Mass (kg/m ²)
Printed dipole	W.C.Brown, 1984	2.45	85	5	Linear	4,000	0.25
Circular patch	M.Onda et al., 1999	2.45	81	5	Dual	263	2.5
Printed dipole	J.J.Schlesaket al., 1988	2.45	70	1	Dual	-	-
Printed dual rhombic	B.Strassner and K.Chang, 2002	5.61	78	0.084	Circular	-	-
Circular patch	Y.Fujino et al., 2002	5.8	76	3	Linear	-	-
Printed dipoles	Y.-H.Suh and K.Chang,, 2002	2.45/5.8	84.4/82.7	0.094/0.052	Linear	-	-
Square patch	P.Koert and J.T.Cha, 1993	8.51	66	0.065	Dual	-	-

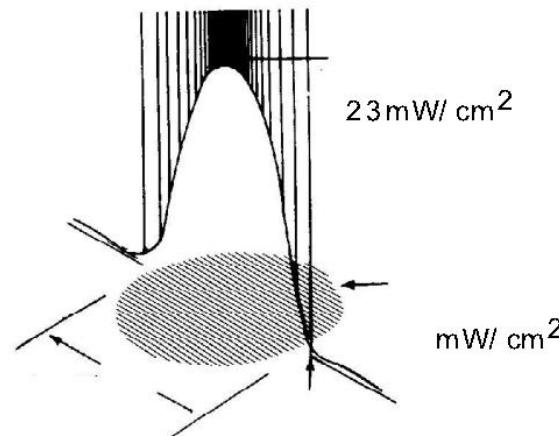
J.O.McSpadden and J.C.Mankins, 2002

マイクロ波の生体への影響(規格)

5.8GHzの例

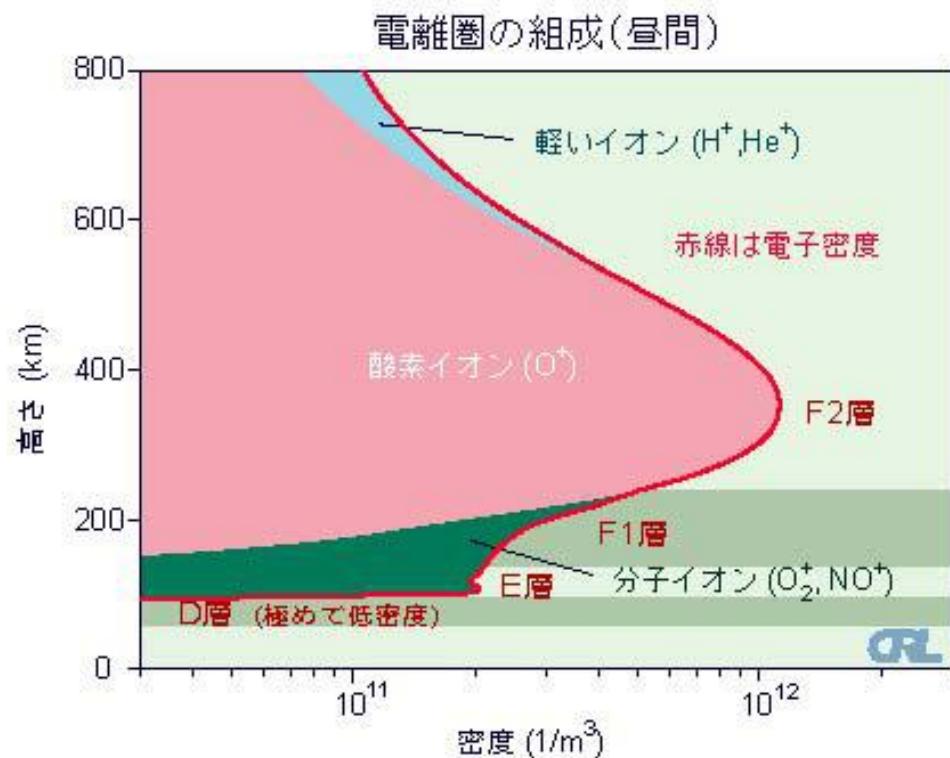
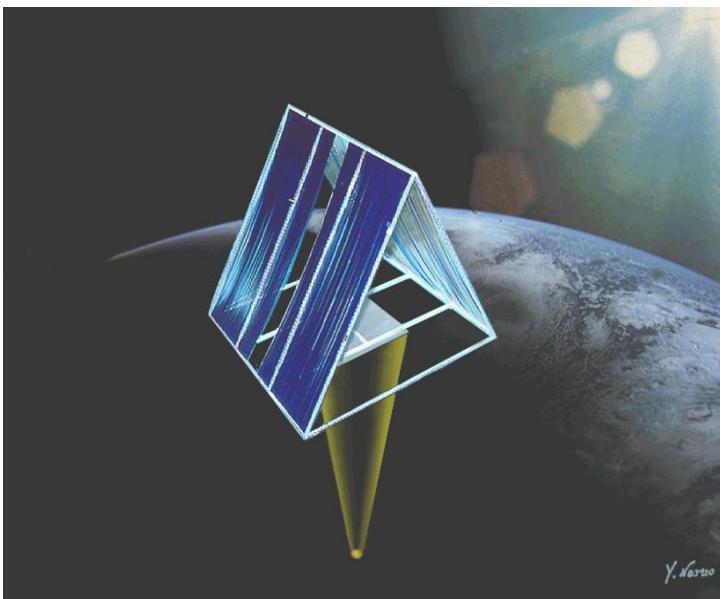
国・機関名	一般公衆への曝露		職業者への曝露	
	電界強度 (V/m)	電力密度 (mW/cm ²)	電界強度 (V/m)	電力密度 (mW/cm ²)
郵政省電気通信技術審議会 [日本] 1990、1997	61.4	1 (一般環境)	137	5 (管理環境)
ANSI / IEEE [米] C95.1-1999	—	3.87 (非管理環境)	—	10 (管理環境)
ICNIRP 1998	61	1 (公衆曝露)	137	5 (職業曝露)

(注)ANSI:米国国家規格協会、
IEEE:米国電気電子学会、
ICNIRP:国際非電離放射線防護協会



マイクロ波と電離層プラズマとの相互作用

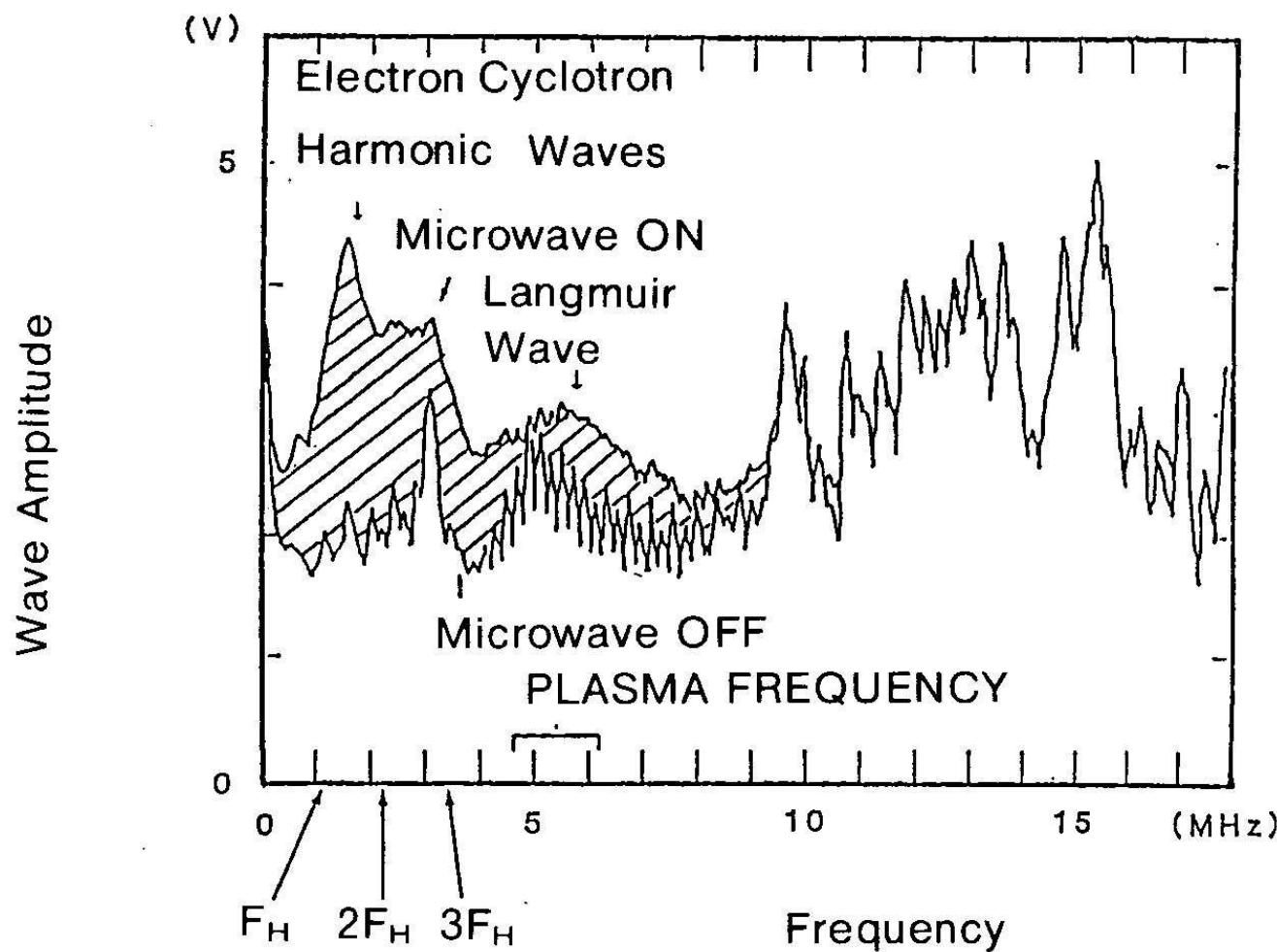
地上へのマイクロ波送電
電離層を通過する必要がある



マイクロ波送電の研究のためのロケット実験



ロケット実験結果



大型構造物に働く力

大型構造物にとって必ずしも無重量ではない。

大型構造物に働く力(重力勾配力)

$M \gg m, r_0 \gg L$ の場合 $T = 3Lm\omega^2 (= 3gL/r_0)$

低高度軌道では1トン10kmで約50N



スペースシャトルで行われた20kmの紐付き衛星伸展実験。重力勾配力により紐がピンと張ることが確認できた。

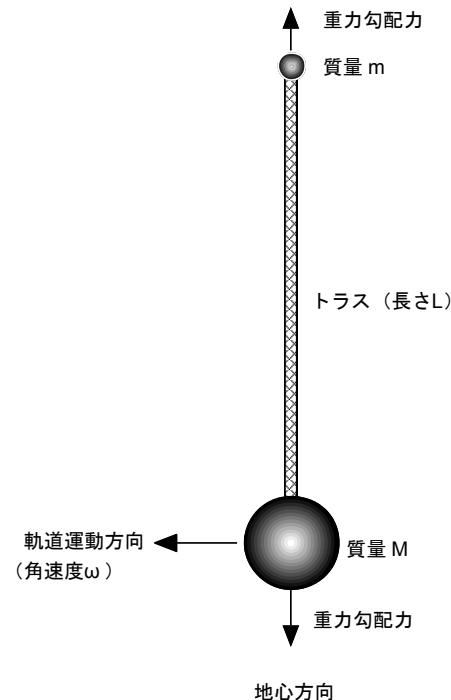
$$T = m\omega^2(r_0 - L) - \frac{Gm_F m}{(r_0 - L)^2}$$

L ローラー質量

r_0 地心距離

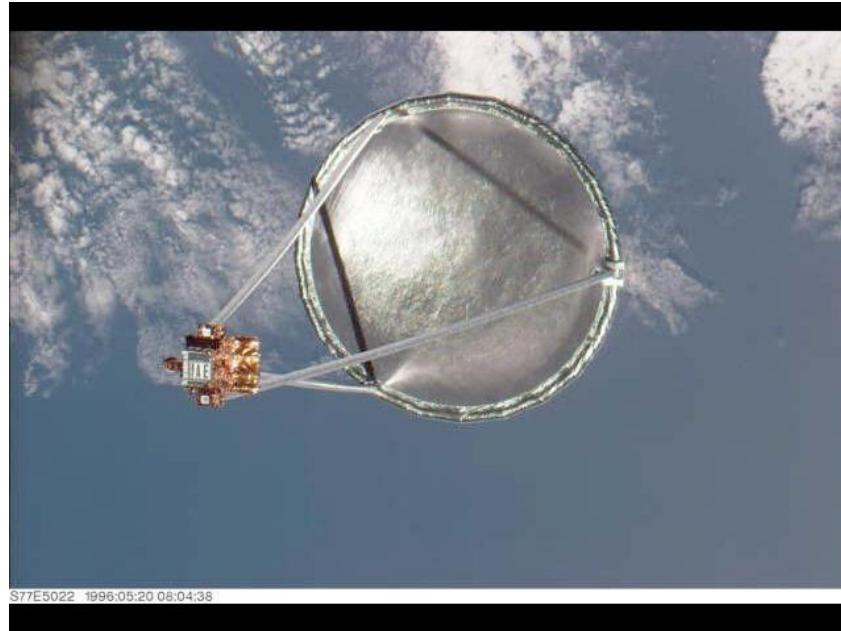
ω 角速度

m_F 質量

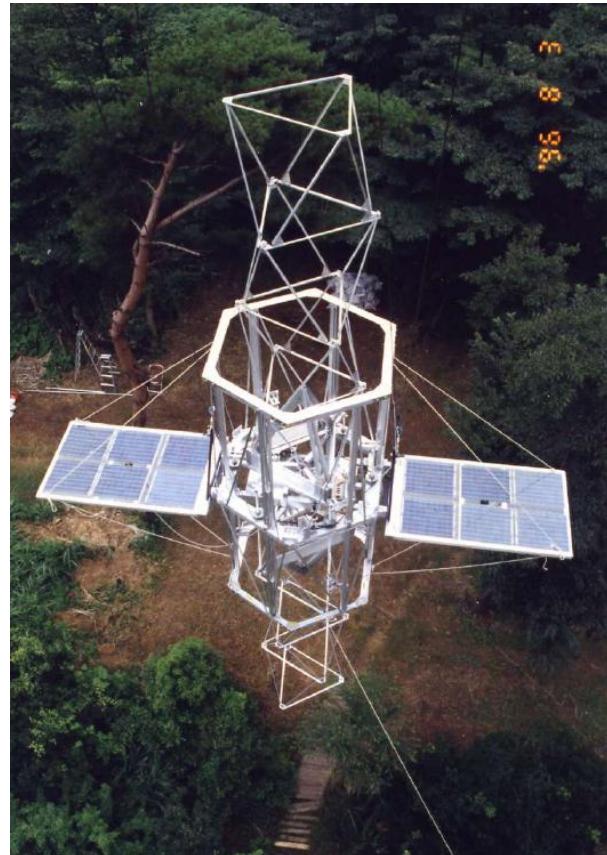


大型構造物構築のためのロボット技術

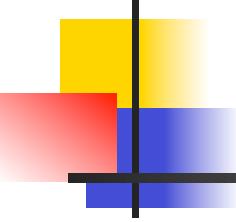
高価な有人作業は必要最小限とする。
構築ロボット、自動展開システム
自動膨張硬化型などの新しい技術が必要。



スペースシャトルによる自動膨張実験



ビームビルダー実験(宇宙研)



宇宙輸送分野の技術課題

技術課題	前提となる産業技術・宇宙技術	宇宙太陽発電技術としての技術開発			
		要素技術開発・評価・実験室実験	地上実証実験	軌道上実証実験 (10MW程度以下)	パイロットプラント (100MWクラス)
低コスト・大量輸送技術	革新的宇宙輸送技術の発展 軌道間輸送技術の発展 宇宙輸送産業の展開 宇宙産業、宇宙観光の展開	-	-	-	-

赤字: SPSのコンフィギュレーションに強く依存しない共通技術、コア技術

青字: オプション技術またはSPSのコンフィギュレーションに強く依存する技術

低コスト打ち上げ輸送手段の開発

現在の試算ではSPS構築のコストの
50%以上は輸送コスト

宇宙輸送コストの低減(現在の輸送コ
ストの1／100程度)がSPS構想成立
のための必要条件

現在の使い捨てロケット方式では低コ
スト化は不可能(H2Aは1機80億円)

再使用型輸送システムの開発が必須

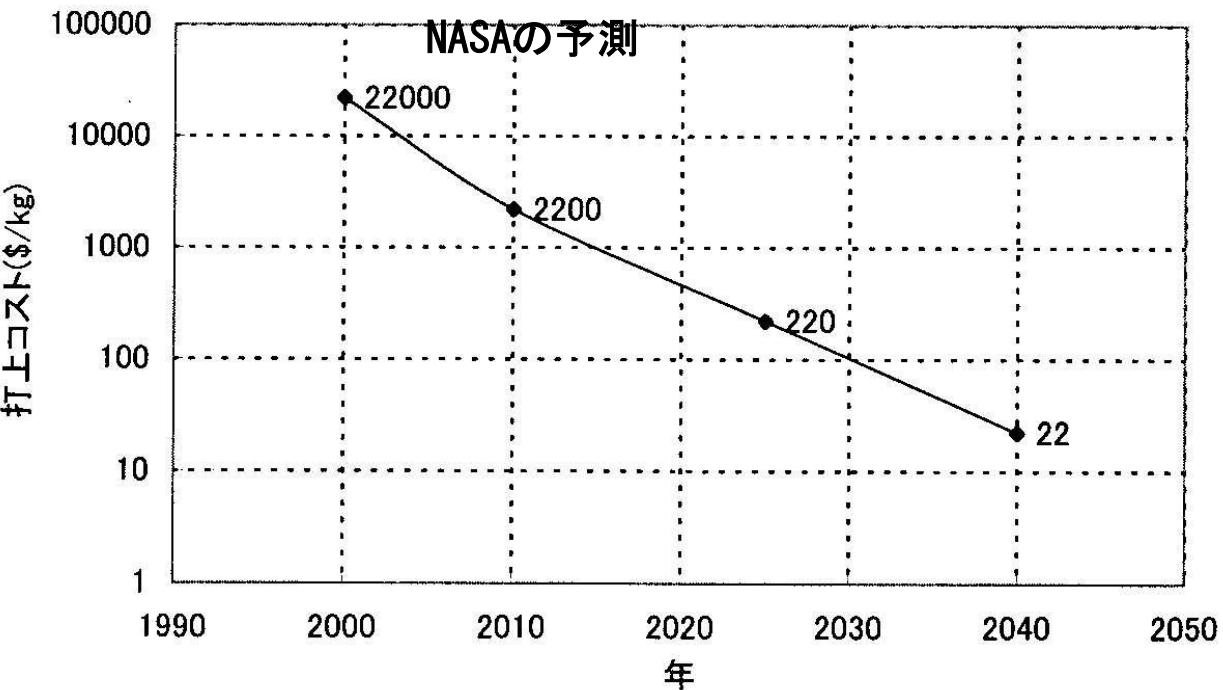
低コスト化のためには大量輸送の需
要が必要



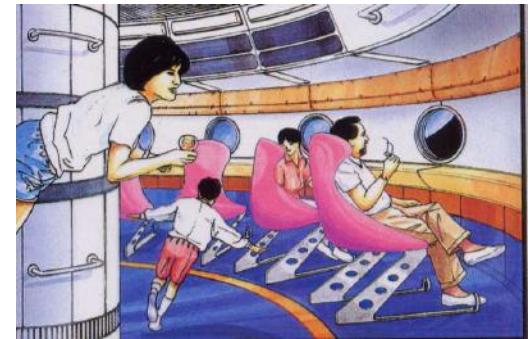
Air Ship One (June 21, 2004)
The first non-governmental
rocket ship flew to the edge of
space and was piloted to a
safe landing on a desert airport
runway here.

宇宙研の再使用ロケット実験

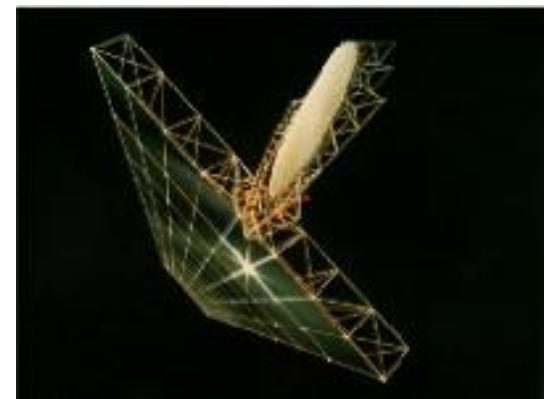
打ち上げ輸送のコスト予測



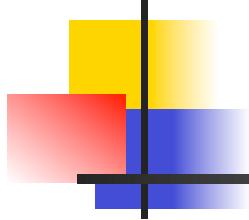
需要



宇宙観光旅行



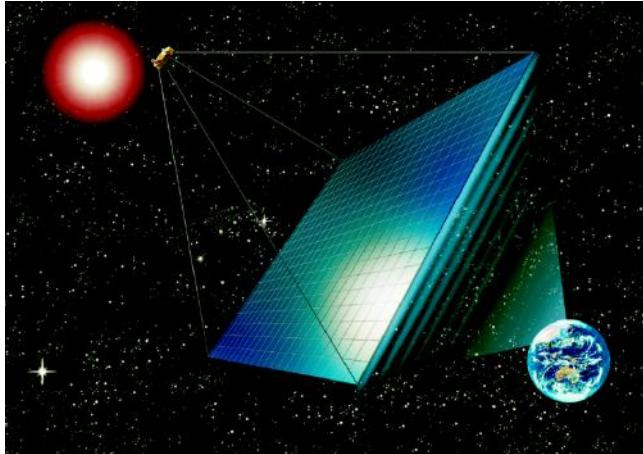
太陽発電衛星



3. 我が国で検討中の太陽発電衛星の構想と実現へのロードマップ

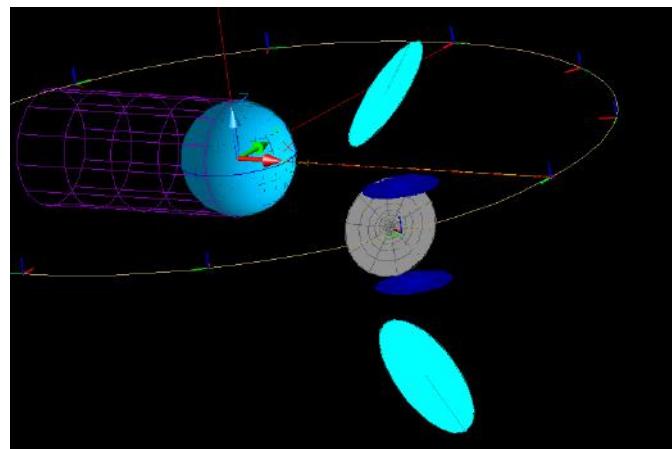
- ・我が国の代表的な商用SPSのモデル
- ・実用化に至るロードマップ

日本のSSPSシステム代表的設計例(1GW級)



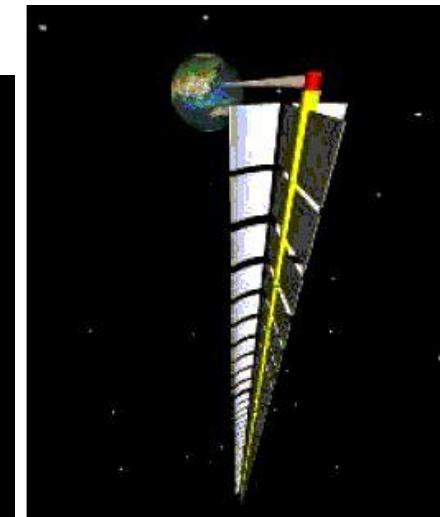
Basic Model

太陽非追尾マイクロ波型
発送電一体型パネル2kmx1.9kmx(2~10)cm^t
テザー
(5~10km)による重力安定
100mx100mパネルのユニット構成
マルチバス方式
総重量2万トン
単純、低い電力効率(64%)



Advanced Model

太陽追尾マイクロ波型
ミラー(反射鏡): 2.5 km x 3.5 km,
1000トンx2式、100~300g/m²
ミラーはフリーフライヤー
発電部: 直径1.25km
集光倍率: 4倍
送電部: 直径1.8km
総重量: 10,000トン以下(目標)
複雑、高い電力取得効率



Laser Model

太陽追尾高集光レーザー型
1モジュール: 10MW、50トン
ミラー(反射鏡): 100mx100mx2式
ラジエーター: 100mx100m
二次光学系、レーザーモジュール: 120m
集光倍率: 数百倍
システム: 100モジュール接続、12km
総重量: 5,000トン(目標)
複雑、システムが小型、雲の影響

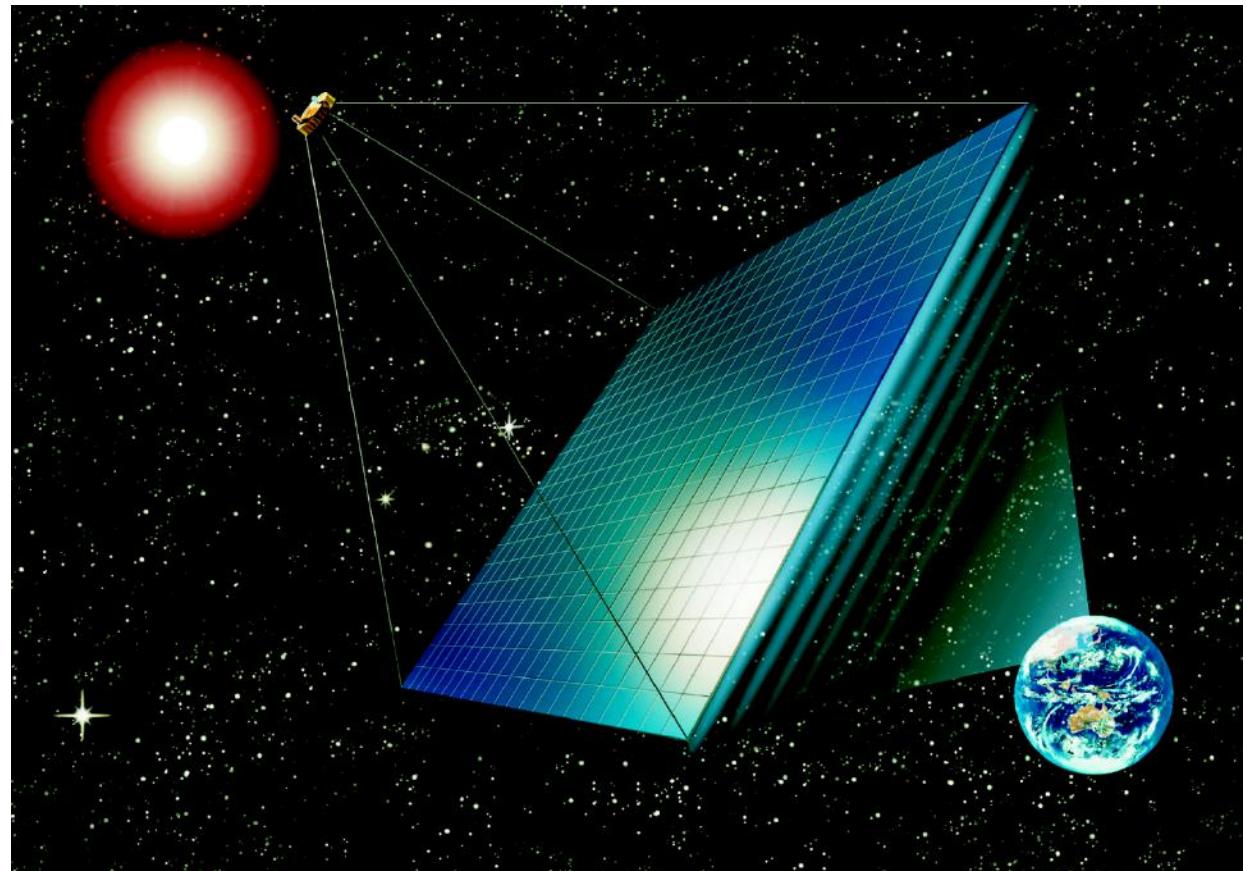
無人宇宙実験システム研究開発機構(USEF)のモデル

1GWモデル

1~2万トン

テザーによる重力安定

単純な構成に特徴



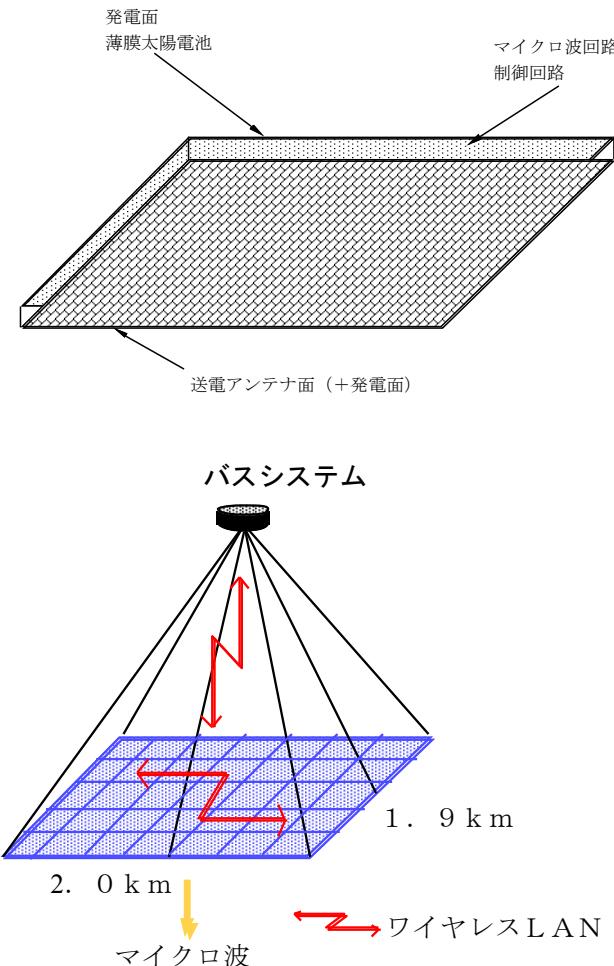
発送電一体型パネルの概念

発送電一体型パネル(電気的にも構造的にも全く等価な多数のモジュールでパネルを構成)

- ・パネル上面の太陽電池で得られた電力は下面のアンテナからマイクロ波として放射
- ・全てのモジュールは無線LANで集中制御

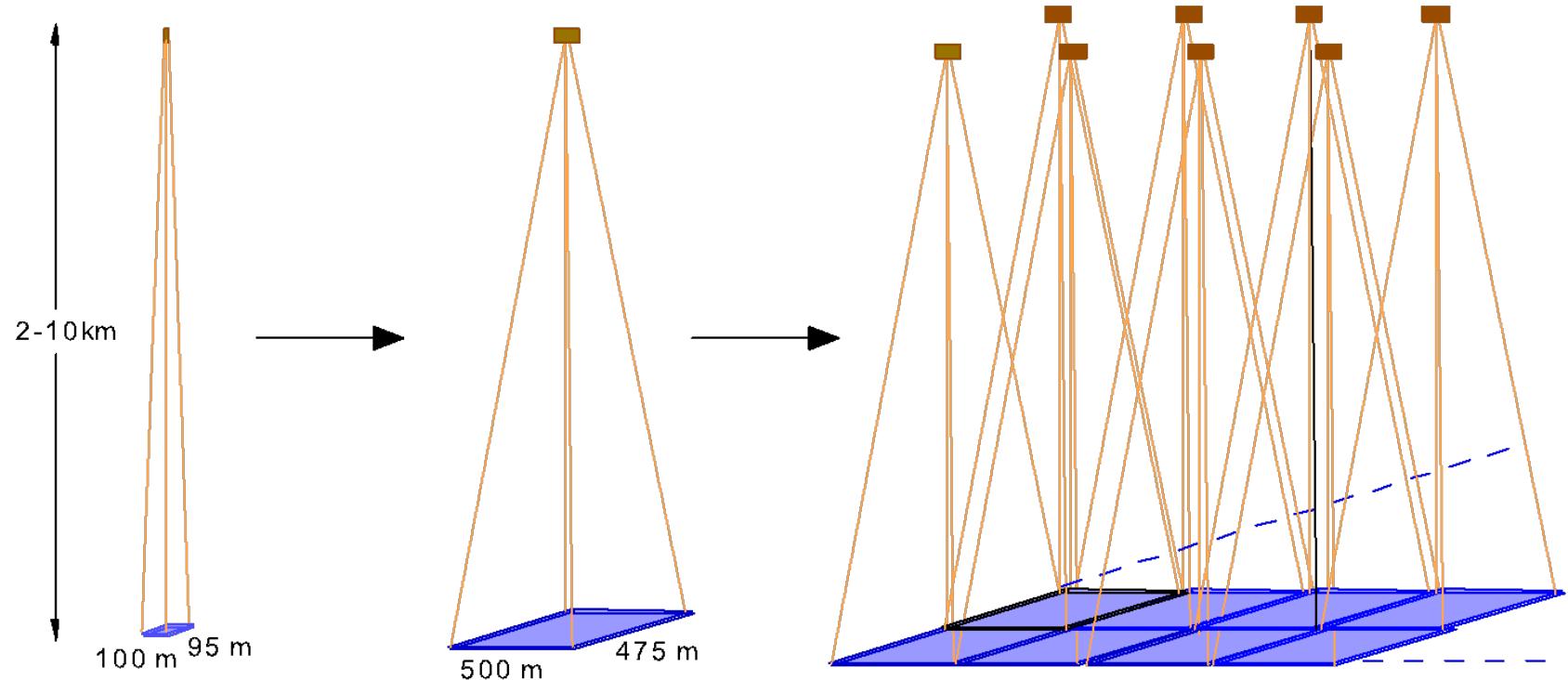
⇒モジュール間には一切の電力、信号ケーブルのインターフェイスはない

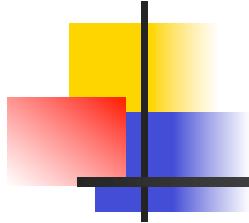
- ・容易な取り付け、取り外し
- ・電力システムとしてロバスト
- ・製造、試験、品質管理が容易



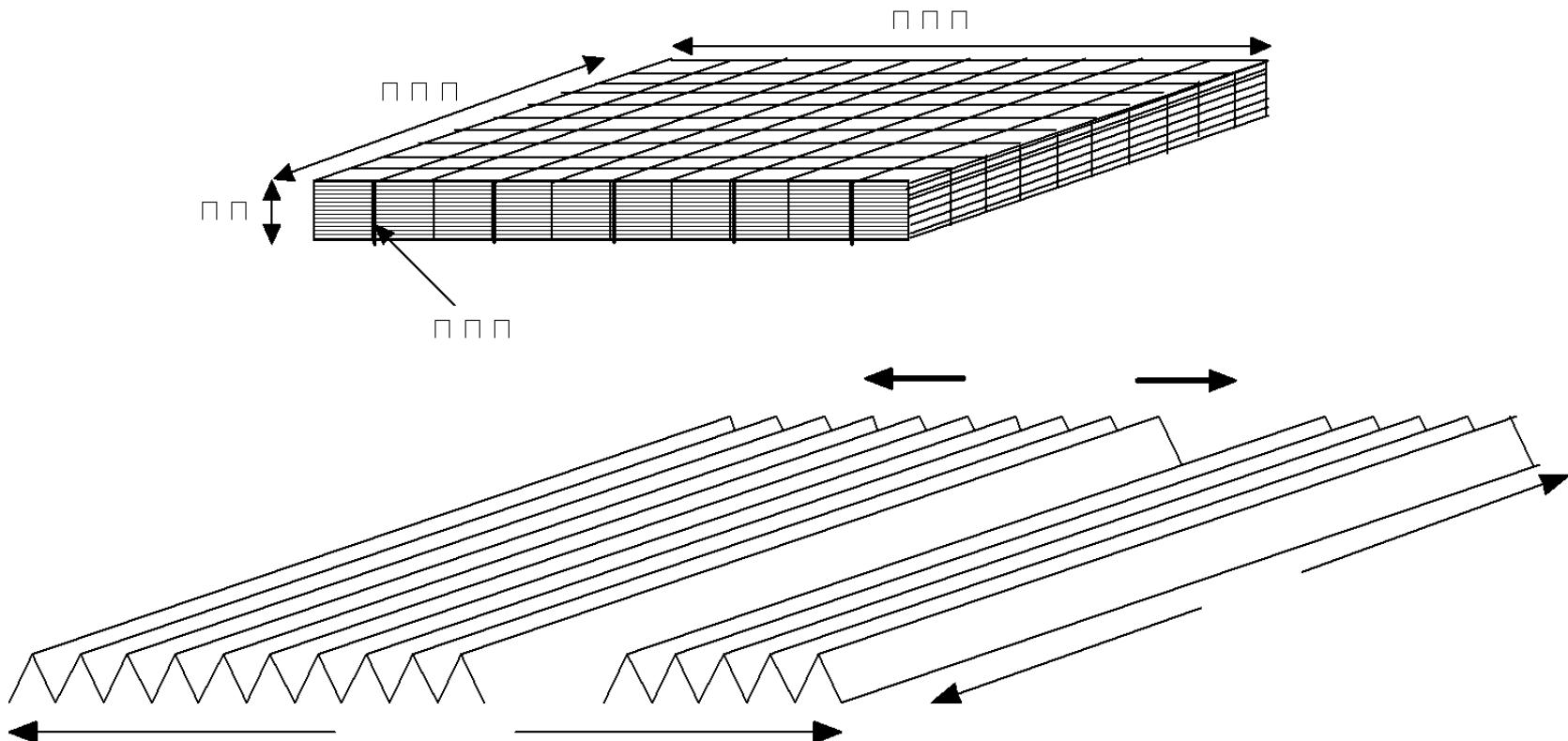
宇宙太陽発電所の建設シナリオ

全重量:26,500 MT 出力:1 GW(一定)



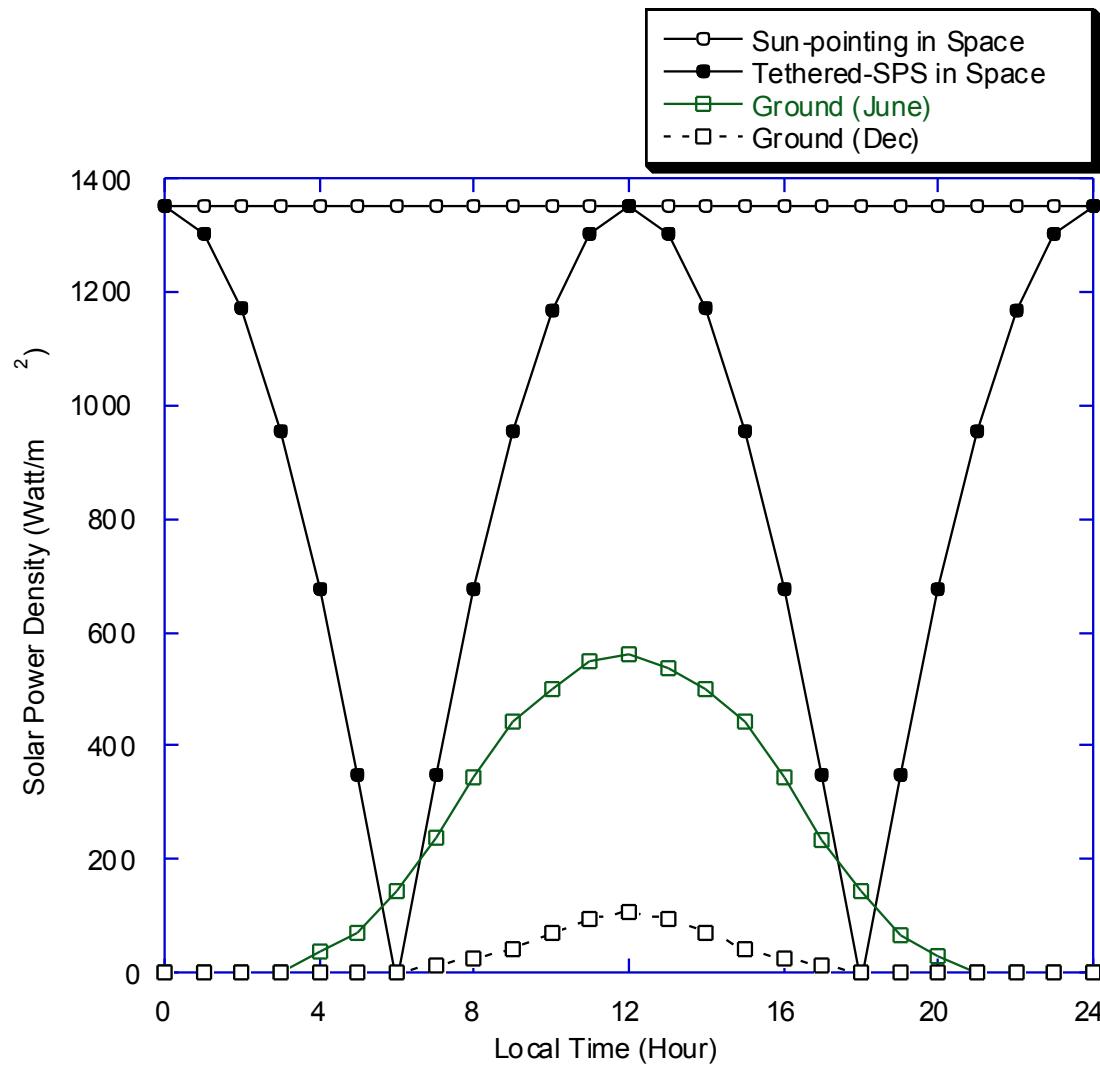


パネルの展開





平板型テザー太陽発電衛星の特性の比較



JAXA 2004/2005年型M-SSPSモデル

1 GWモデル、
可動部を無くすため、ミラー部は太陽輻射圧を利用し編隊飛行させる。
熱的成立性を確保するため発電電力分離型（バス電源）とする。

ミラー（反射鏡）: 2.5 km x 3.5 km, 1000トンx2式、
100~300g/m²

発電部: 直径1.25km(太陽電池638トン、波長選択膜638トン)

集光倍率: 4倍

送電部: 直径1.8km、送電器2685トン、アンテナ763トン、

構造体: 945トン

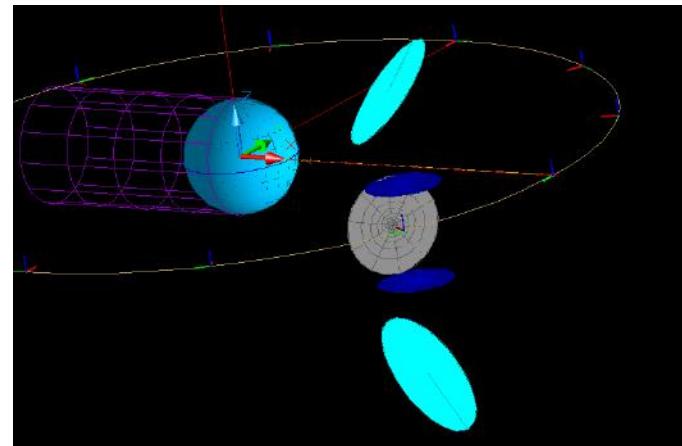
集電ケーブル等: 1340トン

マージン: 900トン

レクテナ: 直径2.74km

総重量: 10,000トン以下（目標）

コスト: 総コスト1.18兆円（宇宙セグメント6800億円、レクテナ2000億円、輸送3000億円）、メンテナンス312億円/年、発電コスト8.6円/kWh（ターゲット: 8円/kWh）



藤田ら、信学技報 Technical Report of IEICE,
SPS2005-24(2006-04)
宇宙エネルギー利用システム検討委員会報告(2008年3月3日)

JAXA 2004/2005年型L-SSPSモデル

1GWモデル=10MWx100モジュール

エネルギーフロー:太陽エネルギー入射

52.1MW(200mx100mx1370W/m²,38,000m²で計算)一二次

集光鏡波長選択32.6W(350nm-950nm,62.6%)—レーザー

增幅器出力10MW(効率19.2%)

太陽光直接励起

CrドープNd:YAG結晶

限界吸収遷移効率:36.9%、目標35%

一次光学系:98%,100g/m²

二次光学系:90%、波長選択膜

地上系

変換効率:50%(現状20%)

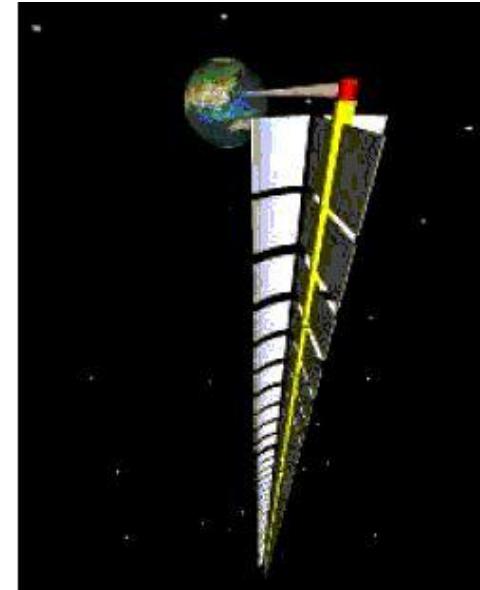
ビーム密度:10kW/ /m²

ビーム径:400m

総合効率

$0.19 \times 0.9 \times 0.5 = 0.086$

(マイクロ波: $0.35 \times 0.85 \times 0.97 \times 0.9 \times 0.85 = 0.22$)



ミラー(反射鏡):100mx100mx2式

ラジエーター:100mx100m

二次光学系、レーザーモジュール:120m

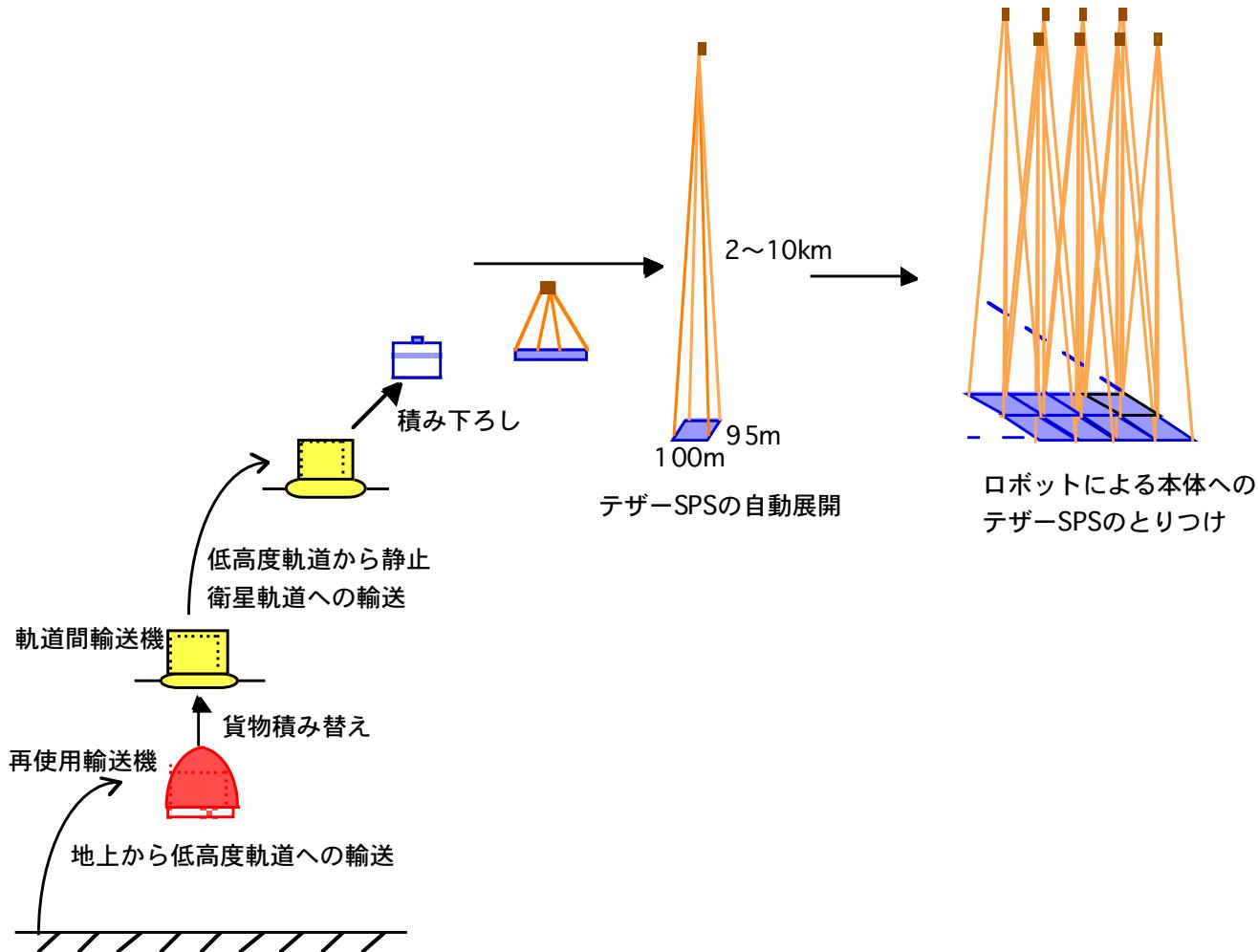
集光倍率:数百倍

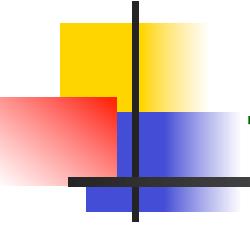
モジュール:10MW、50トン

システム:100モジュール接続、12km

総重量:5,000トン(目標)

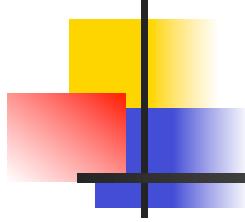
平板型テザー宇宙太陽発電所の建設方法



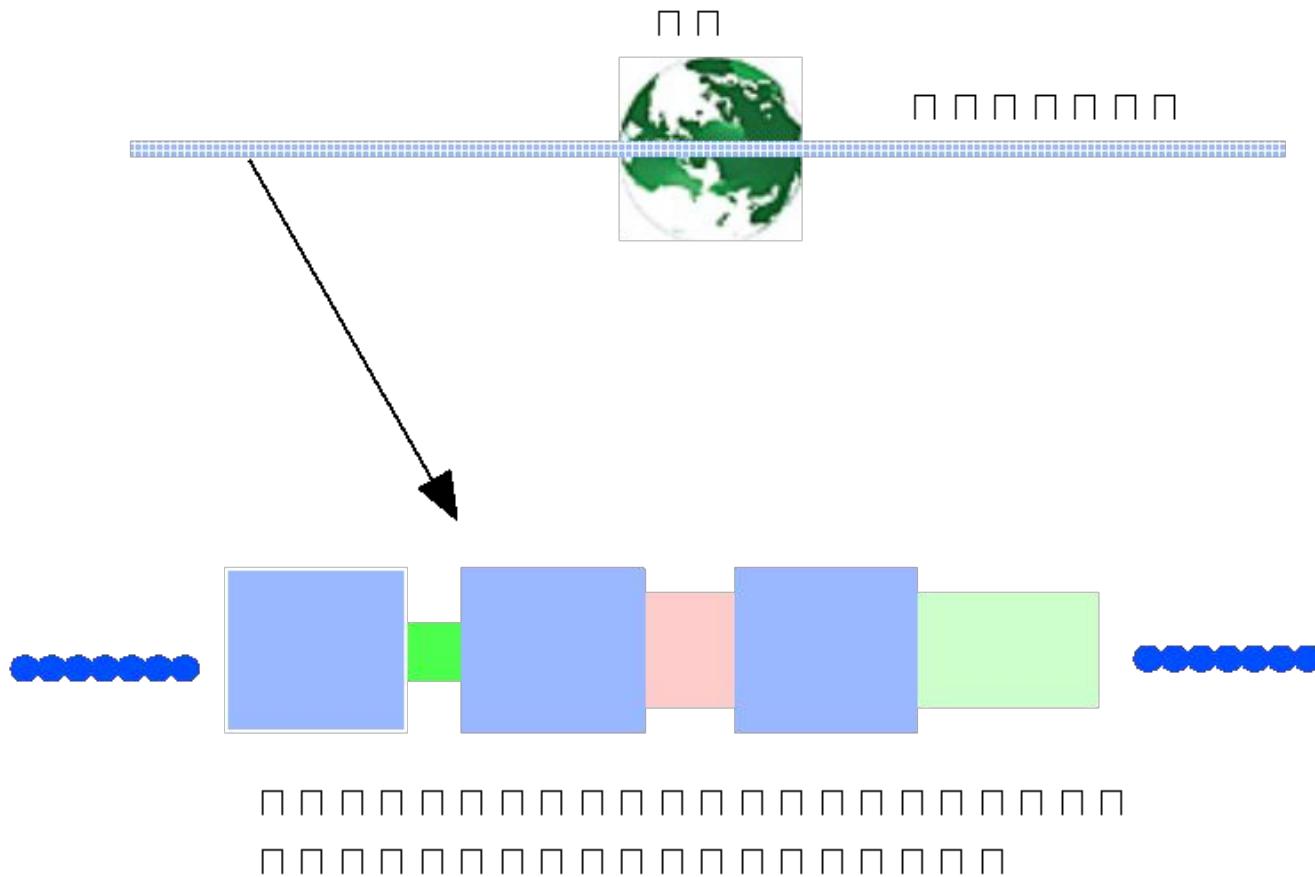


テザーSPSを成立させるために必要な技術レベル

太陽電池技術	発電効率35%, 2kW/kg, 0.5kW/m ² , 50円/W
マイクロ波送電技術	効率85%, 10g/W, 100円/W, 静止衛星軌道から3.5km径のレクテナへ90%の効率で電力を送るマイクロ波制御技術*
蓄電技術	2kWh/kg, 10円/Wh, 充放電効率90%, DOD50%, 充放電寿命30,000回
マイクロ波受電技術	効率85%, 50円/W
輸送コスト	15,000円/kg(地上から低軌道、低軌道から静止軌道衛星)

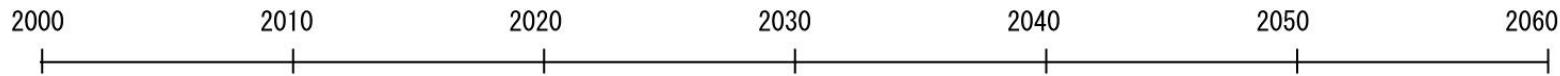


静止衛星軌道に構築する社会インフラのスペースベルト



地球上の全ての一次エネルギー(13000 GW)を出力一定型のテザー-SPSでまかなくした
たら全長32,500kmとなり、スペースベルト全周の14%を占めることになる。

SPS研究開発ロードマップ



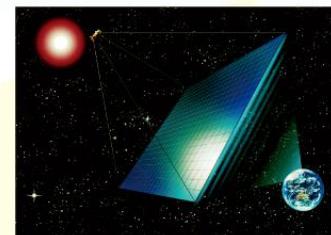
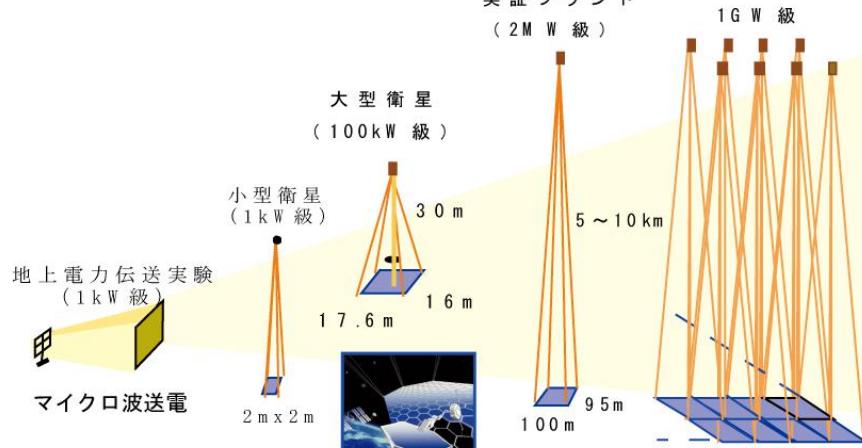
石油（確認可採埋蔵分）減産開始
天然ガス（確認可採埋蔵分）減産開始

人口 90 億人

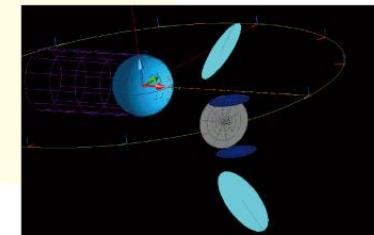
基礎研究フェーズ

開発研究フェーズ

実用フェーズ



ベーシックモデル



アドバンスドモデル

レーザー送電

月惑星探査

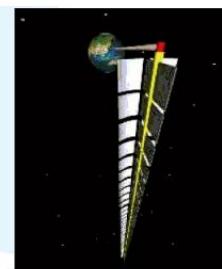


ローバー送電

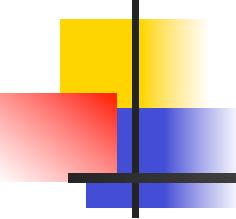
1 MW 級実証プラント



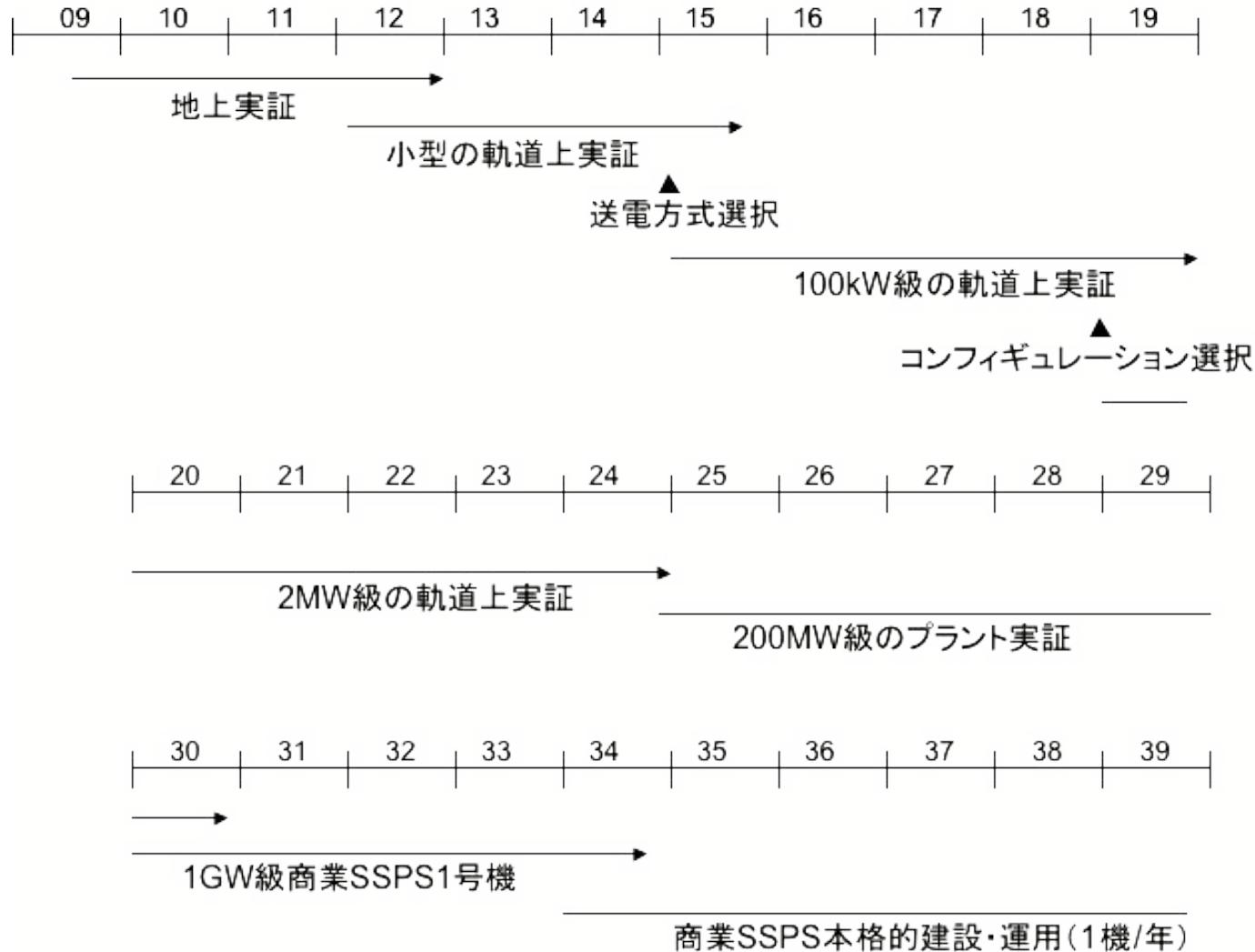
月面基地電力システム



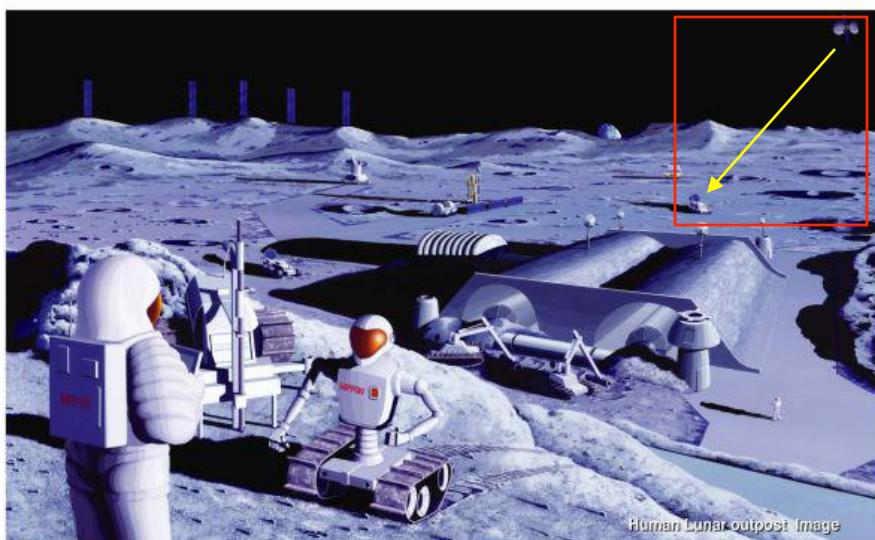
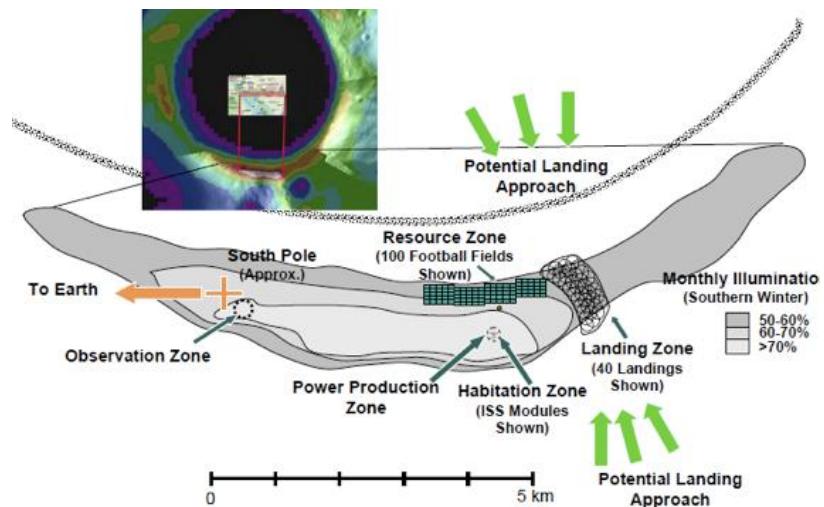
レーザーモデル

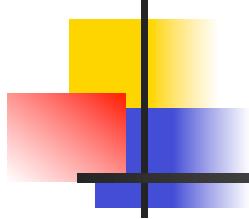


実用化への道のり



月探査基地構想とレーザー送電の応用





4. 研究現状と近未来の実証実験の計画

- ・地上基礎研究

- 発送電一体型モジュール試作

- パネル展開方法

- 耐デブリ衝突研究

- 太陽電池パネルの耐放電研究

- 全機能モデル製作

- 小型ローバーへのマイクロ波送電

- ・地上無線送電デモンストレーション実験

- ・軌道上デモンストレーションの構想

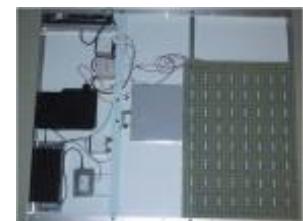
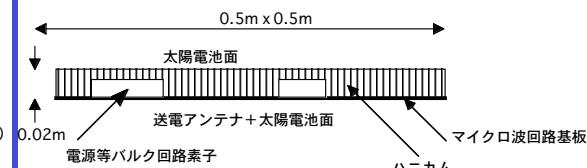
発送電一体型パネルの製作、マイクロ波回路の試作

発送電一体型パネル

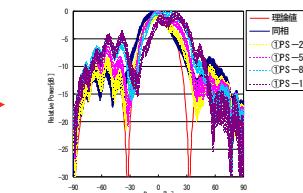
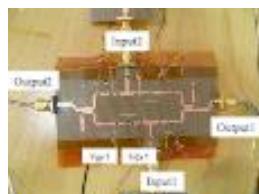
発電・蓄電・送電の全機能を持つモデルを設計・試作・試験

発電面
薄膜太陽電池

送電素子（PCM、集積化アンテナアレイ）
二次電池、充電器、高圧電源、リレー、
モジュール制御路、LAN受信部



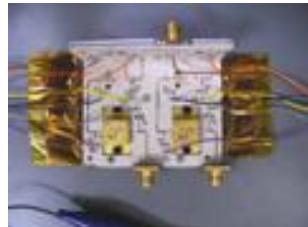
ループ方式位相制御回路を試作、発振確認



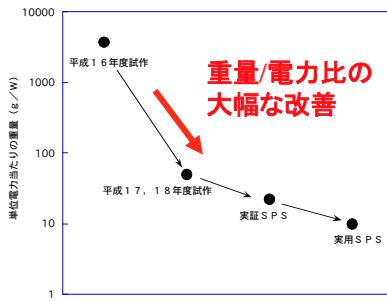
位相制御発振回路

位相制御によるビームの方向制御

軽量高出力アンプ(Wクラス)及び軽量受電アンテナの試作・試験



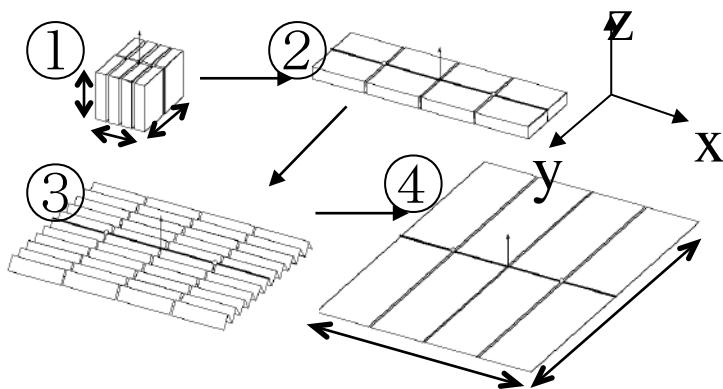
折り曲げ型3段アンプの試作
(4W40%、20dB、30g/W)、京大・USEF共同



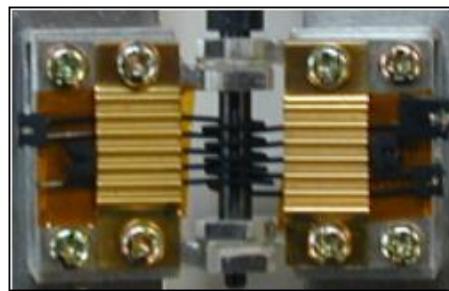
フレキ基板上のレクテナアレイの試作

二次元展開機構の試作試験

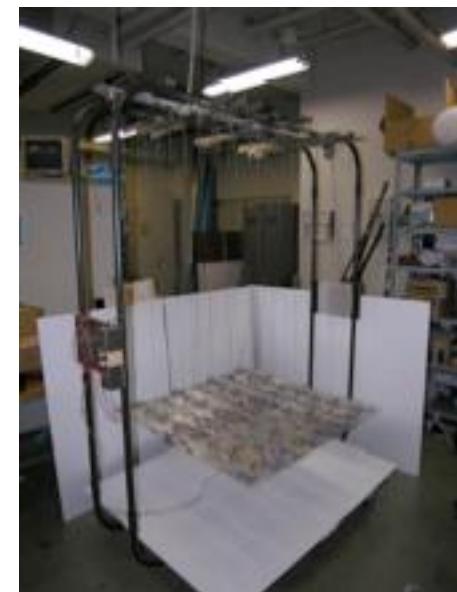
形状記憶素子をアクチュエーターとして用いた二次元展開機構



試験した2種類のSMA



形状記憶合金を組み込んだ
ヒンジ



32枚パネルの展開試験



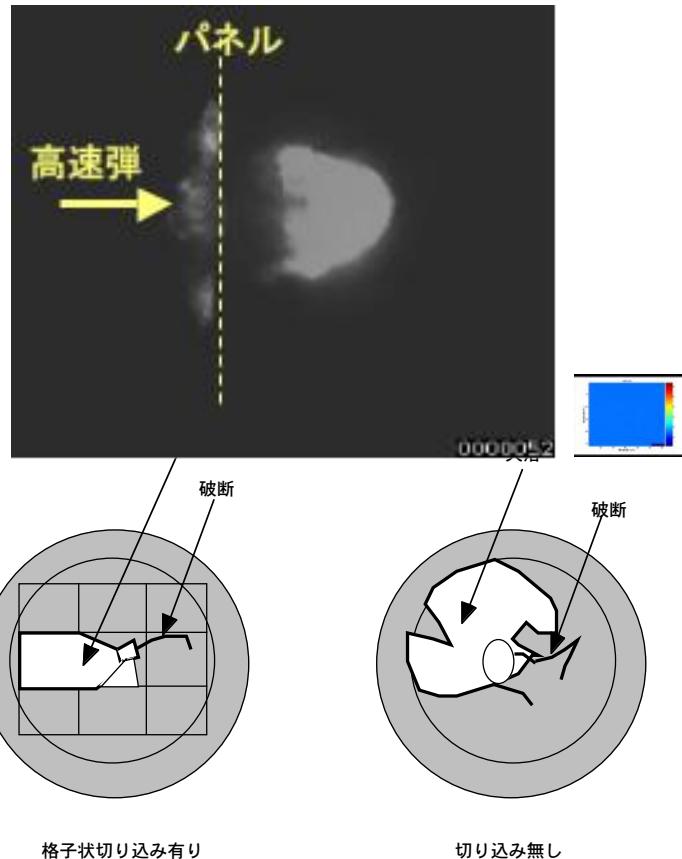
耐デブリ設計のための超高速衝突実験



宇宙のゴミ(スペースデブリ)



超高速実験設備レールガン



格子状に切り込みをいた場合の薄膜の破壊状況。
切り込みがある場合は切り込みに沿った破壊が見
られた。

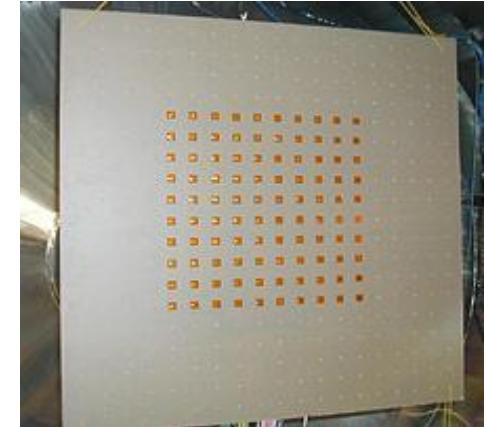
発電面の電位分布の選択のための実験



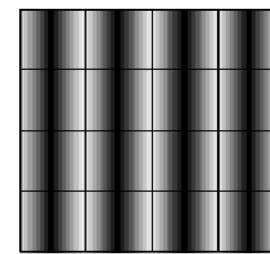
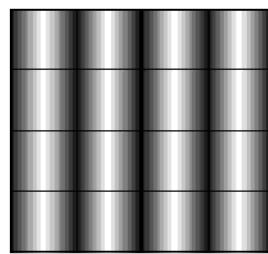
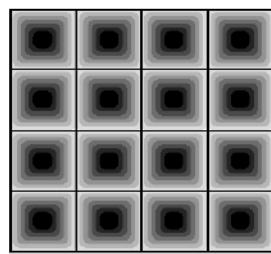
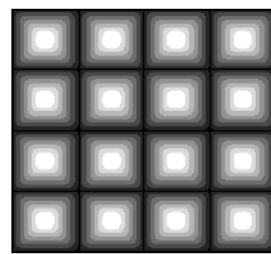
太陽電池パネル



宇宙空間プラズマ模擬試験装置



太陽電池パネル模擬実験装置



□



□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□

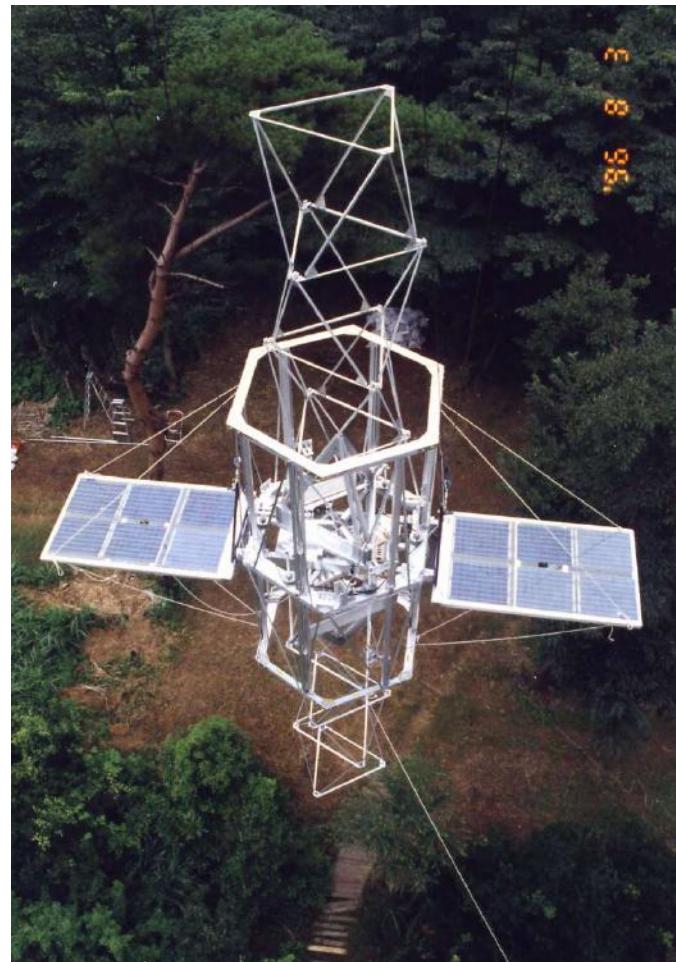
□□□□□□□□□□□□

太陽電池パネル上の電位分布

宇宙太陽発電所のデモンストレーション

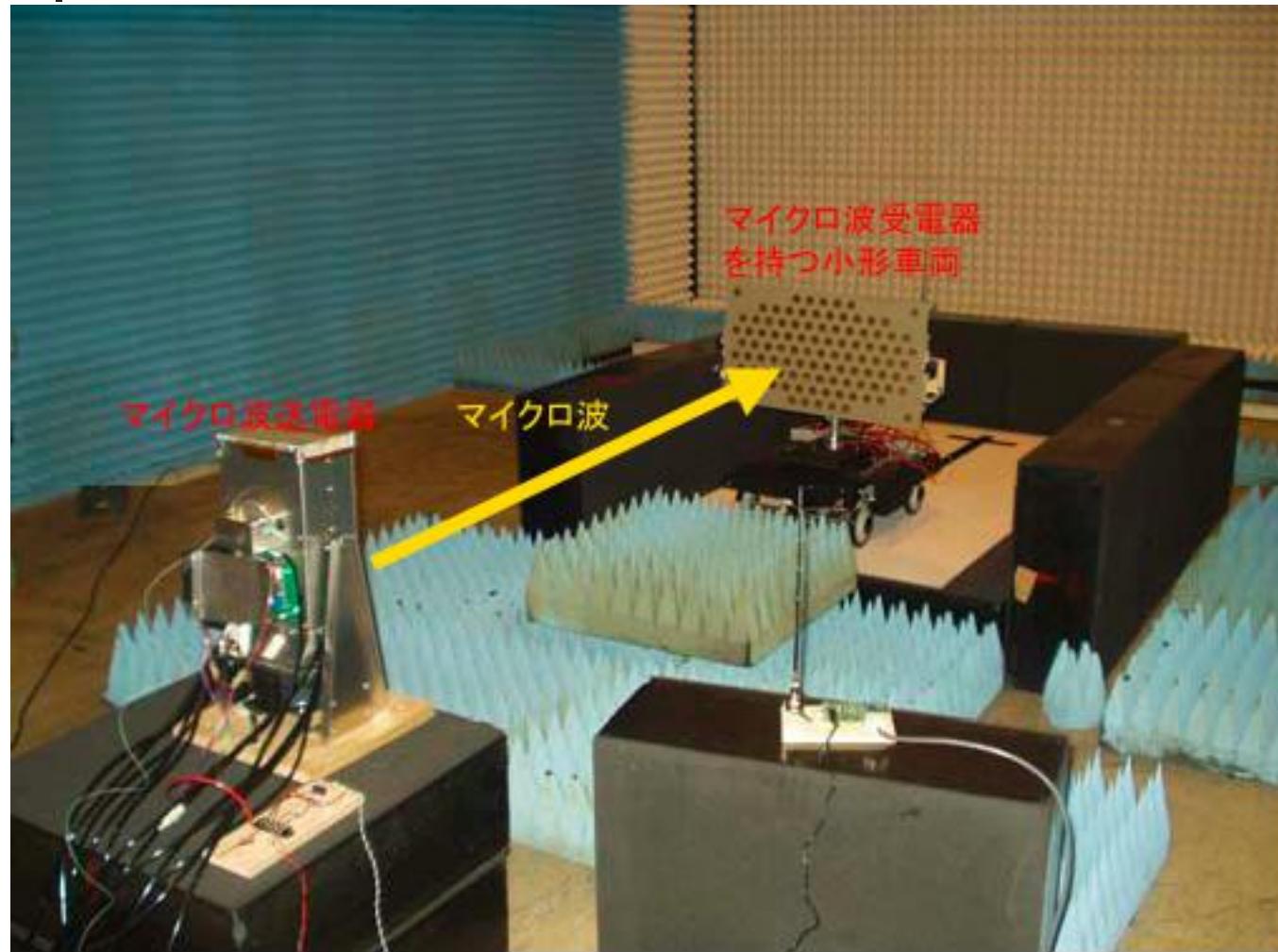


宇宙太陽発電所の全電気機能を持つ
モデルのデモ

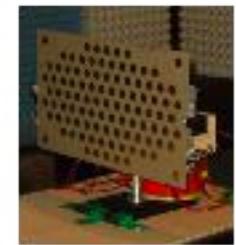


宇宙太陽発電所構築するためのト
ラス自動的組立機械のデモ

小型車両へのマイクロ波送電実験(USEF)



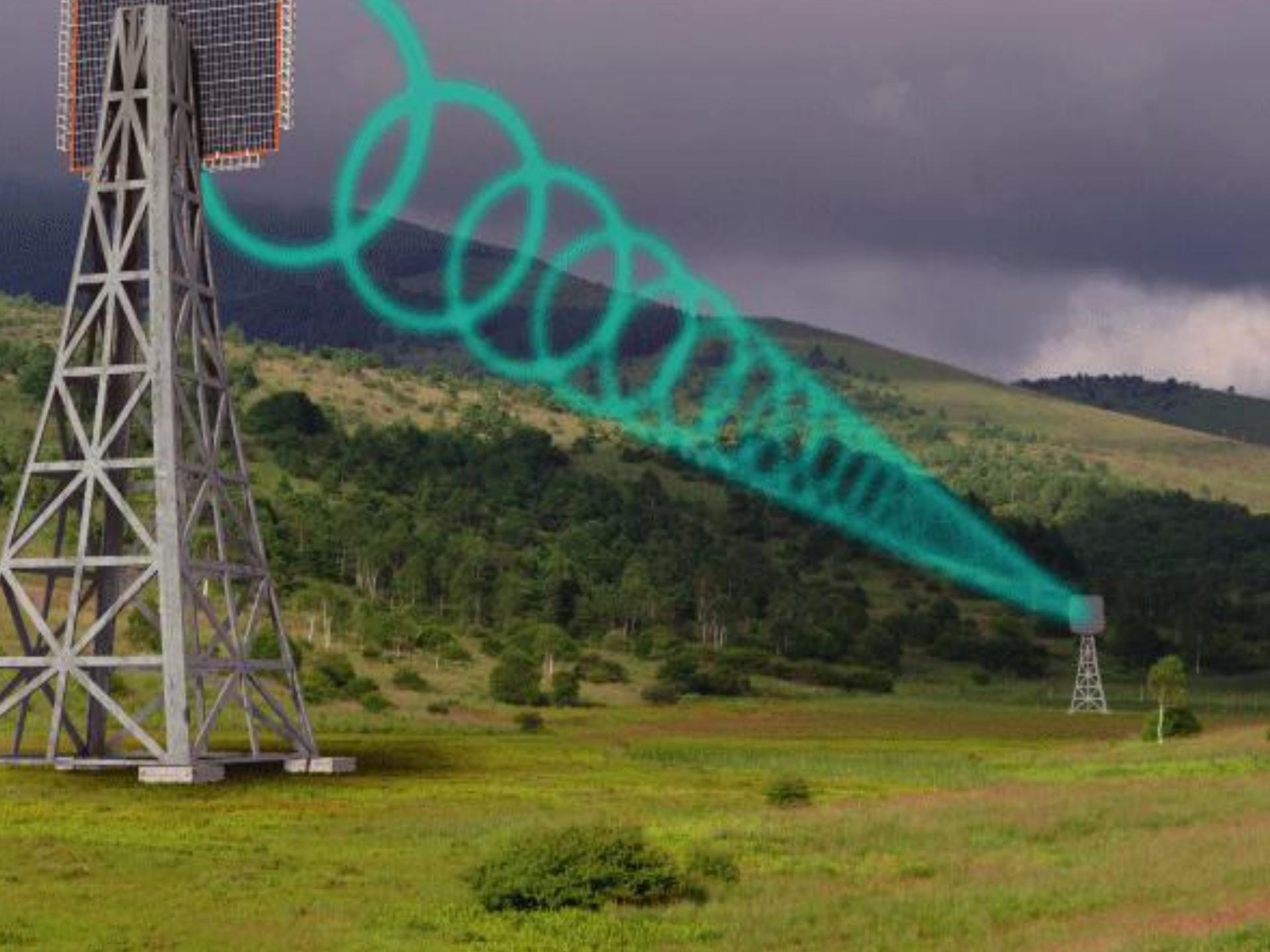
マイクロ波送電器



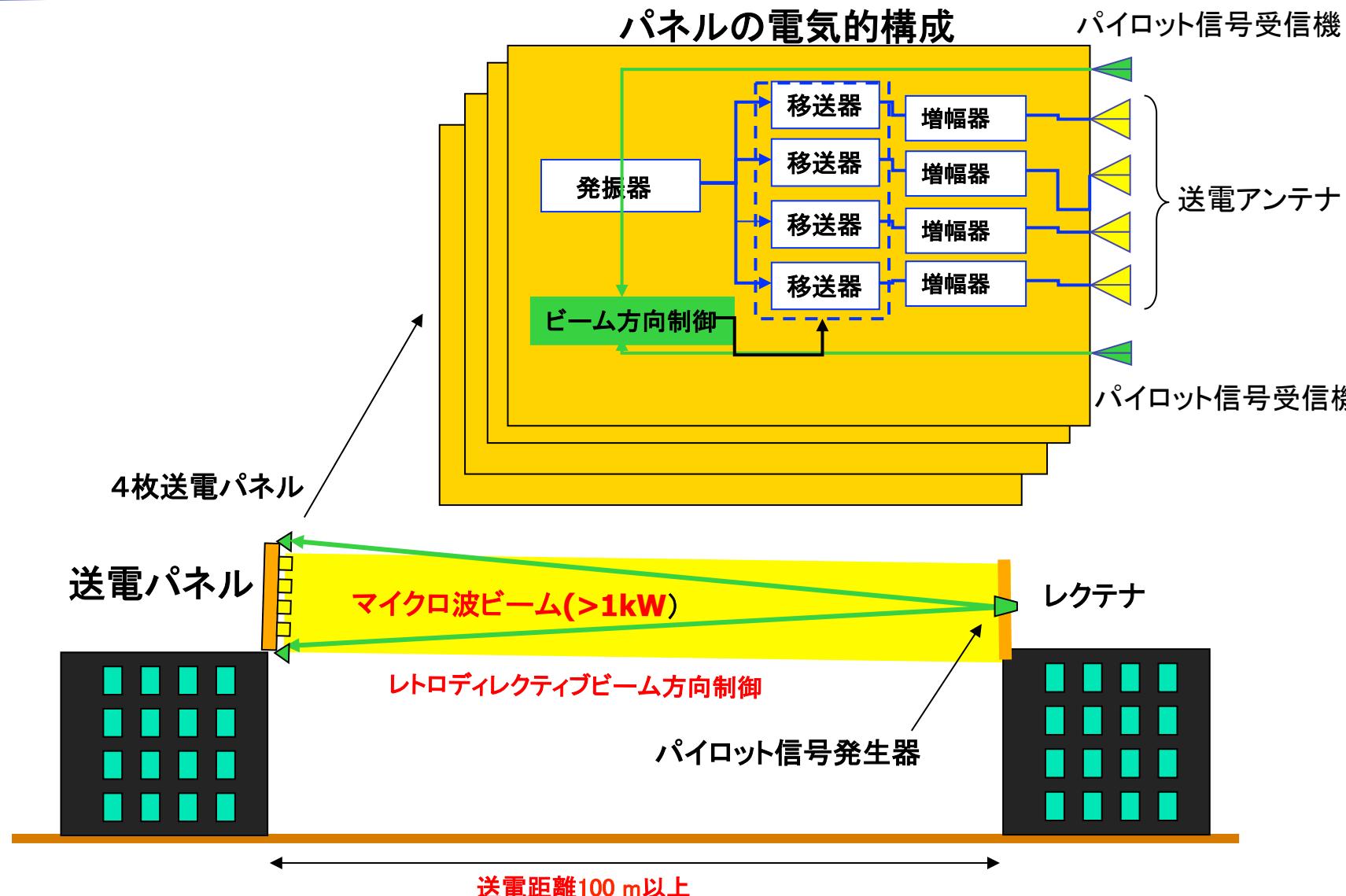
マイクロ波受電器



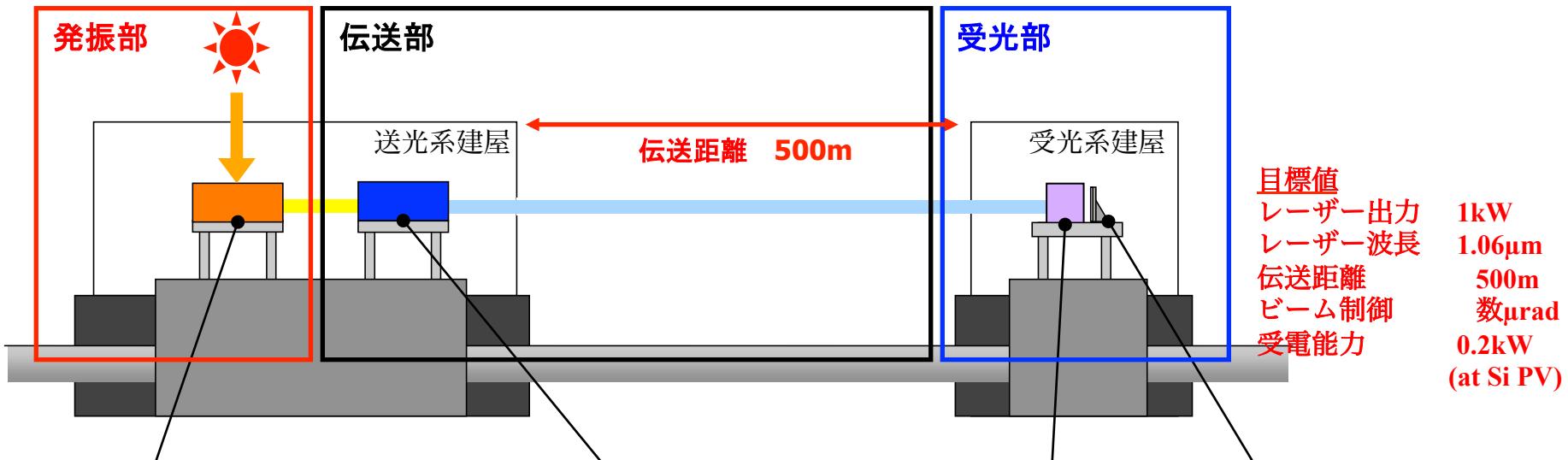
小型車両



マイクロ波SSPS 地上実証実験(1kW クラス)



レーザSSPS 地上実証実験(1kW クラス)



太陽光励起固体レーザーレーザー伝送光学系 (ビーム制御、ビーム波面補償etc.) ム均質化機構 光電変換素子



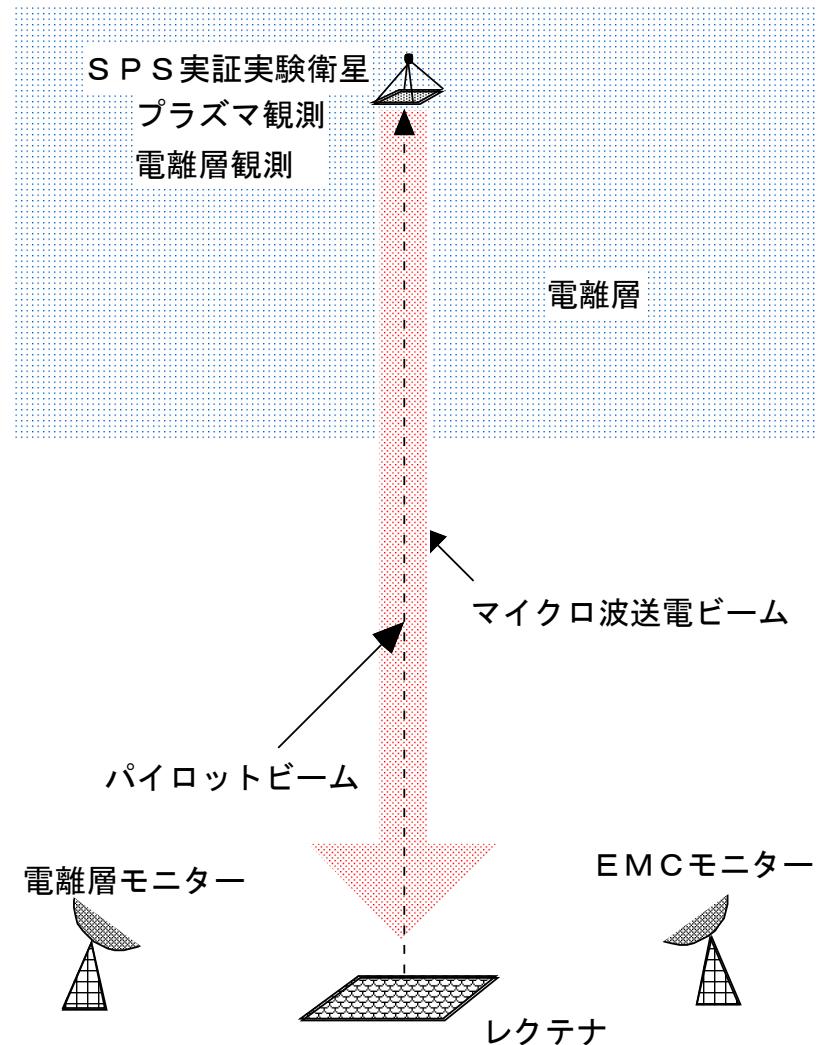
200W クラスレーザー送電実験(角田/JAXA、1998年)

軌道上デモンストレーション実験の目標 —マイクロ波と電離層プラズマの相互作用の解明—

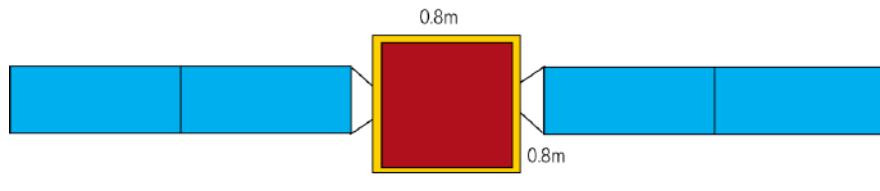
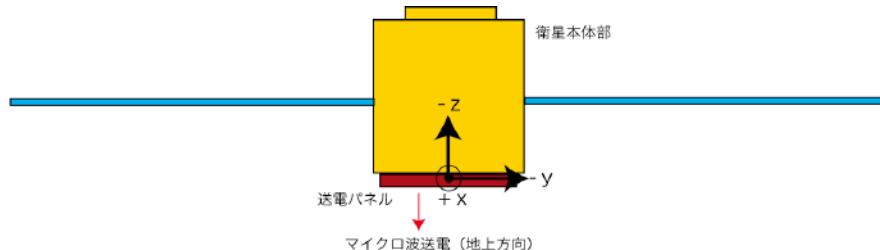
現段階で最も重要な課題は
軌道上から地上へのマイク
ロ波送電実証。

実験目的

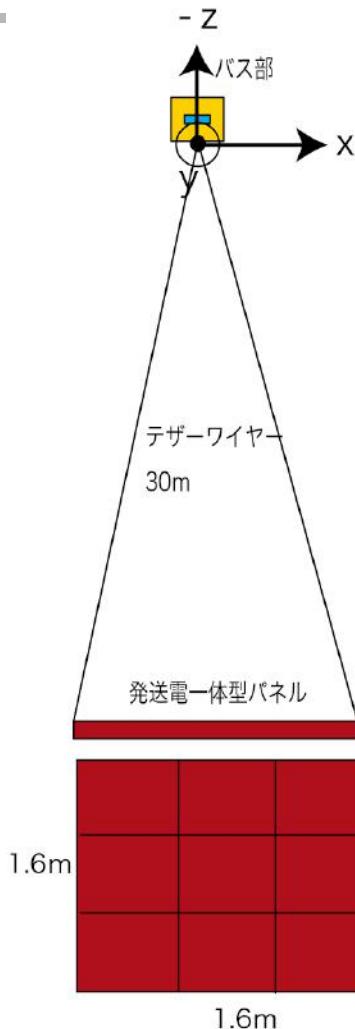
- (1) 軌道上の揺動する大型アンテナか
ら地上のレクテナにピンポイントでマ
イクロ波ビームエネルギーを下ろす
技術の実証
- (2) エネルギーシステムとしての全系で
の電力効率の評価
- (3) 既存の通信インフラに対する電磁適
合性の実証。
- (4) 太陽発電衛星の エネルギーシステ
ムとしての運用手順の研究



SPS小型衛星実験 のコンフィギュレーション

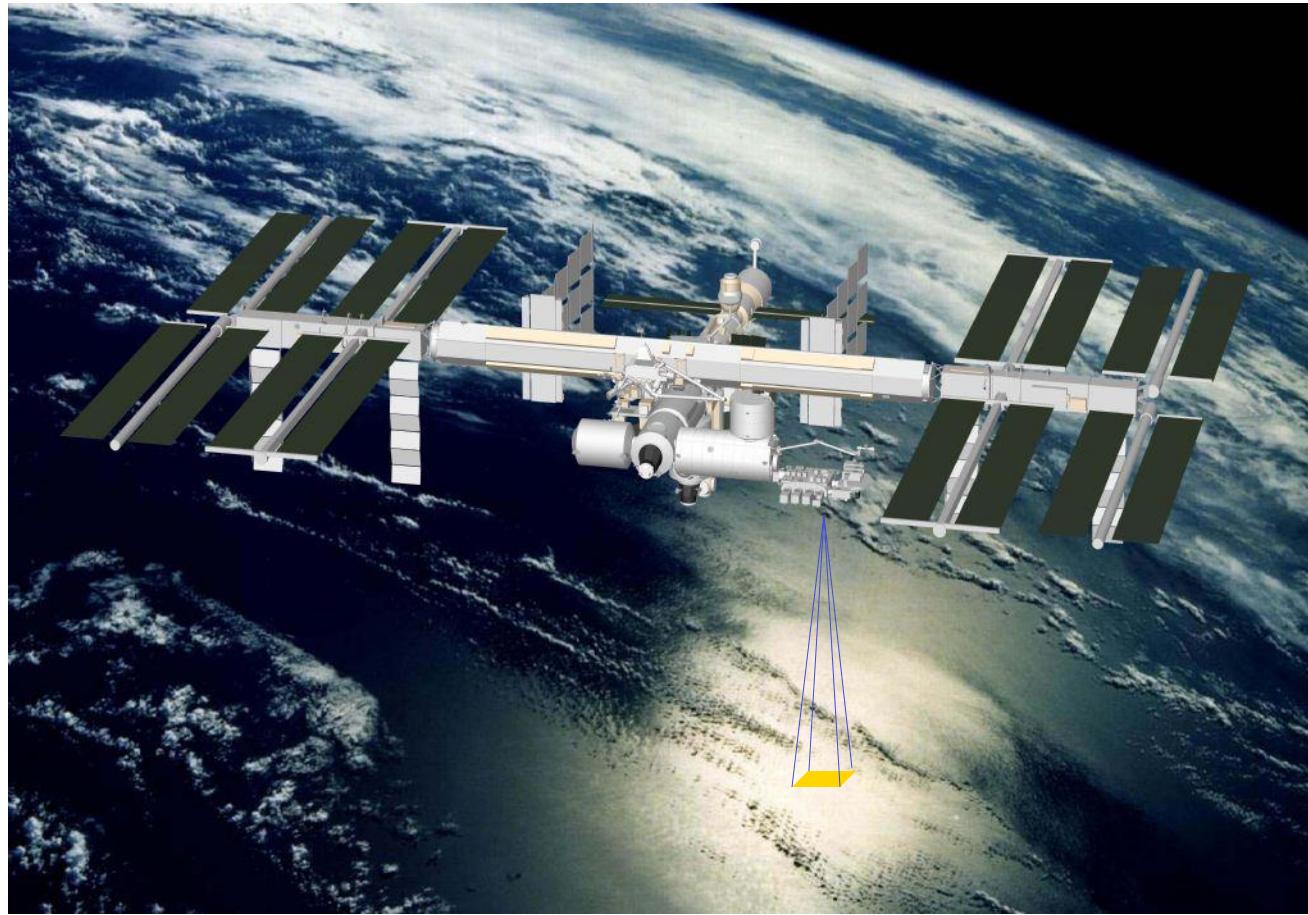


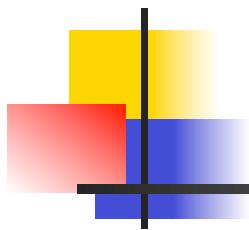
Option A(700 W送電システム、
ミッション重量 65 kg)



Option B (2800W送電システム、
ミッション重量 200 kg)

JEM搭載用マイクロ波送電実験システム





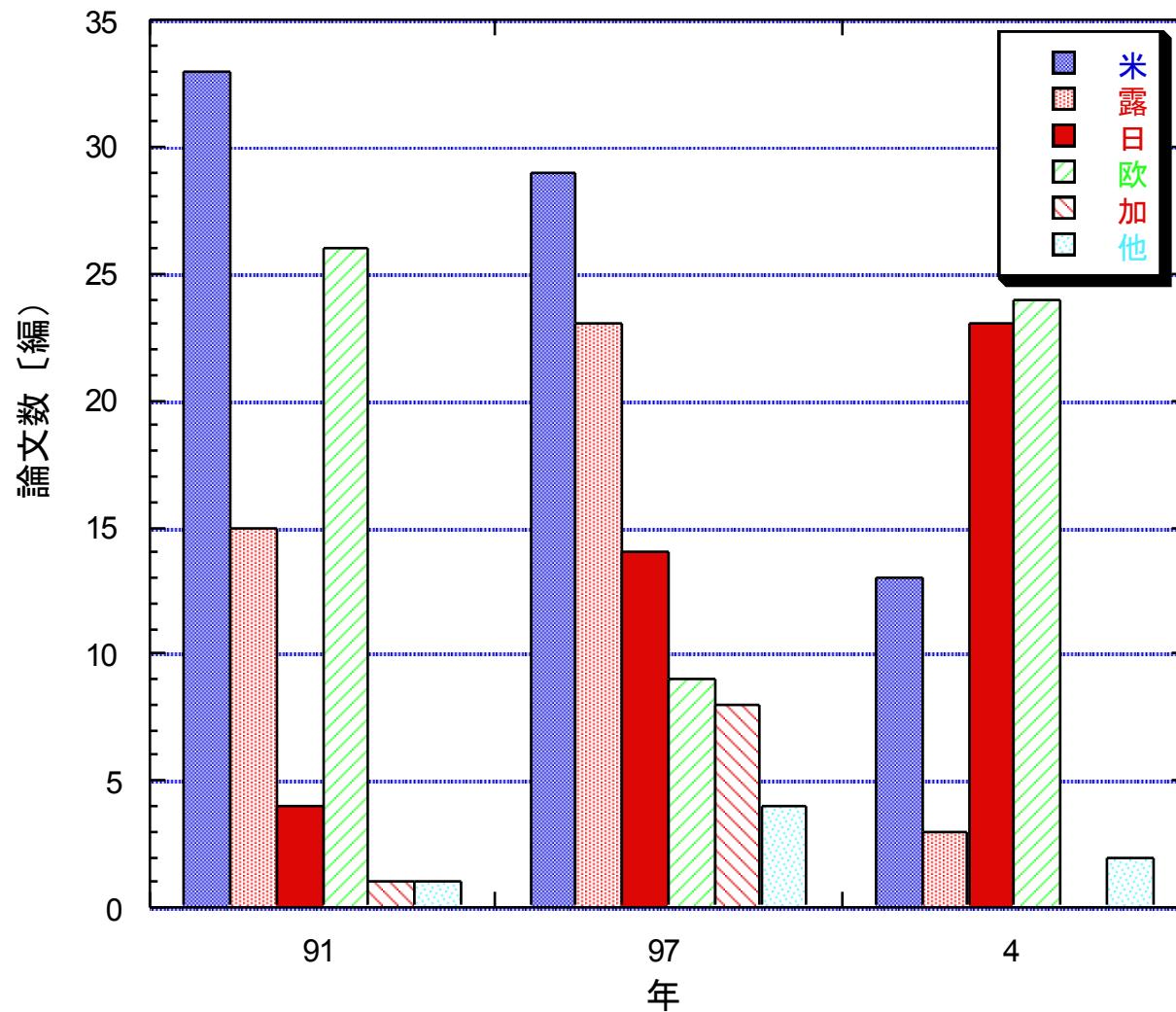
大型衛星を用いた軌道上デモンストレーション実験

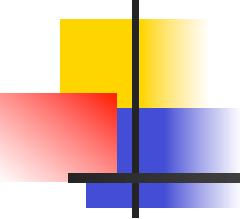


大型ロケットH2-A

宇宙太陽発電所実験システム

国際SPS会議に於ける各国の論文数の推移





SPSに関するアンケート

2004年3月 三菱総研の調査(一般成人2700人、インターネット)

SPSの認知度

SPSを全く知らない	66%
SPSについて聞いたことがある	26%
やや知っている	7%
良く知っている	1%

他の新エネルギー源の認知度

太陽熱利用	77%
風力発電	3%
太陽光発電	63%

SPSの必要性

とても必要	46%
やや必要	33%

SPSを進めるべきか

大いに進めるべき	52%
やや進めるべき	29%

今後のエネルギー源に求めること

安全性	91%
環境に優しいこと	89%
安定供給	75%
安価なこと	52%

地球環境・エネルギー問題解決への挑戦 —宇宙太陽光発電システム—

環境問題、エネルギー問題のような地球規模の問題は、地球閉鎖系の中で解決しようとするのではなく、地球の外即ち宇宙空間に解決の道を探るべきではなかろうか。

宇宙空間には、地上と異なり広大な場と天候に左右されないふんだんな太陽エネルギーがある。SPS構想は、人類のフロンティアである宇宙空間を人類のエネルギー取得の場として利用しようとするものであり、クリーンで大規模なエネルギーシステムとして大きな可能性を持っている。

現段階でSPSが将来の人類のエネルギーシステムとして最善の選択肢であることが示されている訳ではないが、将来エネルギーとして極めて有力な選択肢であることは間違いない。

SPSが真に人類社会の救世主になりうることを検証するため、本格的な軌道上実証実験に着手すべき段階に来ている。